

昭和62・63年度

唐古・鍵遺跡

第32・33次発掘調査概報

1989

田原本町教育委員会



SK-124 木器貯藏穴 (弥生時代中期)

序

昭和62・63年度に行いました唐古・鍵遺跡第32次、第33次（2年継続の国庫補助対象事業）発掘調査の成果を、田原本町埋蔵文化財調査概要11にまとめ、このたび発刊いたすことになりました。

唐古・鍵遺跡の調査は、奈良県立橿原考古学研究所のあとを受けて、昭和57年の第13次調査以来、田原本町教育委員会が調査を担当して参りましたが、現在までにはほぼ、遺跡の集落範囲をとらえられるまでになりました。

今回の二つの調査は、未確認でありました遺跡の南限が明らかとなり、昭和52年の第3次調査で確認された遺構や遺物とも関連づけられるものも多く発見する事ができました。ここに調査地を提供いただきました方、調査に従事いただきました方々、さらに本書の編集にあたり御教示賜りました先生方に厚く御礼申し上げます。

奈良県田原本町教育委員会

教育長 岩井光男

例 言

1. 本書は、田原本町教育委員会が昭和62年度及び昭和63年度の国庫補助事業として実施した奈良県磯城郡田原本町大字唐古及び鏡所在の唐古・鏡遺跡第32・33次発掘調査概報である。

2. 調査は以下のとおりの関係者でおこなった。

田原本町教育委員会 教 育 長 岩井光男

教育次長 吉川周伯

文化財保存課課長 森山 淳

◆ 課員 沢井利夫

◆ ◆ 藤田二郎 (現地調査)

3. 調査にあたっては、土地所有者である竹村豊治、竹村 治両氏より多大な御理解と御協力を賜わった。

4. 調査補助員としては以下の学生が参加した。

桑原久男・吉井秀夫・河野一隆・伊藤淳史 (京都大学)、豆谷和之・広瀬克彦 (奈良大学)、

天石夏実・若林邦彦 (同志社大学)、中島明美 (立命館大学)

出土遺物の整理作業にあたっては、上記学生の他、梅原・恵・河野典子両氏の協力があった。

また、発掘作業にあたっては下記の方々が参加した。

岡田はまゑ・末広利雄・末広真理子・田辺寛・中谷義弘・福島義弘・福島加代子・前田きよ子・宮崎玲子

5. 発掘及び概報作製にあたっては、下記の方々の御教示を賜わった。記して感謝の意を表します。

石野博信・寺沢薫 (奈良県立橿原考古学研究所)、岩永省三・深沢芳樹 (奈良国立文化財研究所)、

森造一 (同志社大学)、中村友博 (山口大学)

6. 本概報の執筆・編集は藤山があたった。

本文目次

I. はじめに	1
II. 第32次発掘調査の概要	
1. 調査の全容	3
2. 遺構	
(1). 堆積土層	3
(2). 遺構	4
S D-101・S D-102, S D-103	
3. 出土遺物	5
S D-103及び包含層出土土器	
4. まとめ	6
III. 第33次発掘調査の概要	
1. 調査の全容	7
2. 遺構	
(1). 堆積土層	8
(2). 弥生時代前期の遺構	12
S K-208, S D-110, S D-120, S D-202	
(3). 弥生時代中期の遺構	14
S K-123, S K-175, S K-164, S K-168	
S K-134, S K-124, S K-111, S K-120	
S K-159, S K-130, S D-114, S D-108	
S D-109, S D-115	
(4). 弥生時代後期の遺構	20
S K-125, S K-133, S K-114, S K-135	
S D-103	
3. 出土遺物	
(1). 土器	23
S K-208出土土器, S D-120出土土器, S K-124出土土器	
S K-120出土土器, S D-109出土土器, S K-125出土土器	
甕人土器, 線刻画土器	
(2). 木製品	54
農具, 工具, 容器・食膳具, 武器・祭祀具, 用途不明品他	

(3). 石器	61
打製石器，磨製石器	
(4). 金属器・骨角製品・玉類	63
金属器，骨角製品，玉類	
(5). 祭祀遺物	64
卜骨	
(6). 自然遺物	65
動物骨，穂束・種子類	
4. まとめ	
(1). 遺構	66
(2). 遺物	67

1. はじめに

唐古・鏡遺跡の調査は昭和63年7月までに35度を数えるまでに至っている。唐古・鏡遺跡の調査として昭和11・12年の1次、昭和42・43年の2次があった後、昭和52年から毎年継続的におこなわれてきている。そして、昭和57年の13次調査以降、調査は県から町に移った。これまでの調査をまとめたのが第1表である。

第1表 唐古・鏡遺跡の発掘調査の原因一覧表

昭和 年度	11	42	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	計	
範囲確認	0	1 (1)	0	1 (5)	2 (7-8)	1 (11)	0	0	0	0	2 (24-25)	1 (27)	1 (30)	9	
開発	公共	1 (1)	0	1 (3)	1 (4)	2 (6-9)	1 (10)	1 (12)	0	1 (16)	0	1 (23)	4 (24-28)	2 (34-35)	15
	民間	0	0	0	0	0	0	3 (13-14-15)	3 (16-17-18)	1 (26)	2 (31-32)	0	2 (33-34)	11	
計	1	1	1	2	4	2	1	3	4	1	5	5	5	35	

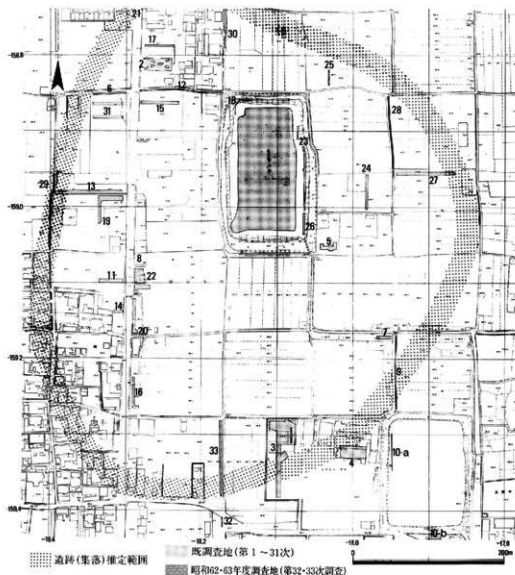
() は発掘調査の次数を表わす

これによると、大きく二つの傾向が見出される。昭和56年までは、県の調査で範囲確認をベースに公共事業に伴う調査がおこなわれていたのに対し、57年以降は町の調査となり民間の開発と公共事業に伴う調査が主体的におこなわれてきている。ここ2・3年は公共事業が目だってきているが、これは用水路整備と老朽ため池工事に伴う農業関連のものである。このようにみえていくと昭和57年以降の調査が計23件あり、そのうち19件までが開発に伴うものという高比率である点はみのがせない。史跡指定を目前にしたかけ込み的な開発が目立つゆえ、早急に遺跡保護のための行政処置をとる必要にせまられている。幸いにも、昭和62年から63年にかけて第33次調査を実施することができたことは重要であった。史跡指定をおこなううえで不明確であった東部地域を第27次調査として実施し、今回は南側の不明確部分を調査することができた。これによって、ほぼ遺跡の範囲をおさえられるところまで来たといえよう。

さて、昭和62年度は第31～35次までの調査をおこなったが、国庫補助事業としては第32次と第33次であり、本書に掲載する分である。他の調査は『埋蔵文化財調査概要12』として報告する予定である。第32・33次調査は遺跡の南端部の調査である。32次は個人住宅建築に伴うもの、33次は範囲確認に伴うものである。いずれもムラの南端を把握する上で重要であった。特に33次では、弥生時代前期から古墳時代前期までの多数の遺構・遺物を検出した。なかでも、弥生時代前期の微高地を1単位とする遺構と水田跡と思われるものが認識できたのをはじめ、細形銅矛片や木製の戈などの発見は本遺跡の重要性を認識する上で重要な調査となった。

第2表 昭和62年度 国庫補助事業調査地一覧表

調査回数	所在地	原因	地目	調査期間	調査面積
第32次	鍵 142-4	住宅建築	宅地	1987.9.10~9.15	31.5㎡
第33次	鍵 262-1	範囲確認	畑	1987.11.5~1988.5.1 (1988.2.1~3.31まで4回)	約300㎡



第1図 唐古・鍵遺跡の範囲と調査地点

II. 第32次発掘調査の概要

1. 調査の全容

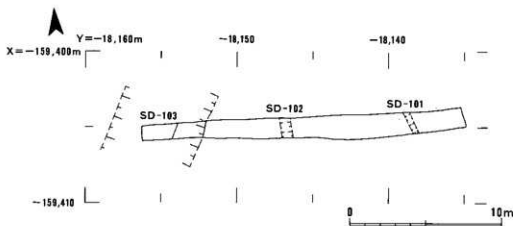
本調査地は遺跡の南端部にあたり、第3次調査地の南西約50mの地点である。この周辺はいままで調査の対象となることがなく、遺跡の様子がよくわからなかった地域である。調査対象地は大宇賀142-4番地で、農家住宅建築にあたって調査する機会を得た。トレンチは対象地の南端で東西に細長いトレンチとした。トレンチは幅約1.5m、長さ約21mとし、面積31.5m²の小規模な調査となった。

この付近は微低地部分にあたり、土地が軟弱であったことや長雨のため、トレンチ壁面が崩壊し十分な調査は不可能となった。しかし、トレンチの各部で小溝や大溝を検出することができたことは大きな成果となった。大溝は弥生時代後期のもので環濠になるとと思われるものである。今回の調査は、遺構・遺物とも少なかったが菅占・鏡ムラの南端部の様子が把握でき、範囲を知る上で重要な地点となった。

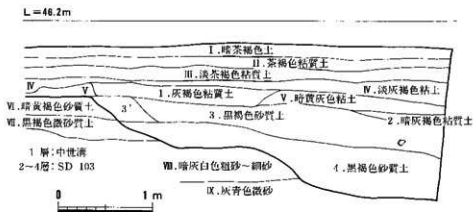
2. 遺構

(1) 堆積土層

本調査地の堆積土層は、単純な土層構成を示している。第Ⅰ層は暗茶褐色土層で、水田耕上層である。第Ⅱ層は茶褐色粘質土層、第Ⅲ層は淡茶褐色粘質土層で、この両層は同質で、水田床土層となる。第Ⅳ層は淡灰褐色粘土層、第Ⅴ層は暗黄灰色粘土層で、第Ⅴ層上面で中世遺構面となる。第Ⅵ層は暗黄褐色砂質土層、第Ⅶ層は黒褐色微砂質土層で、第Ⅶ層上面で弥生時代後期の遺構面となる。第Ⅷ層は暗灰白色粗砂から細砂層に漸格的に変化している。第Ⅷ層の下位はさらに砂粒度が細かく変化しており、第Ⅸ層では灰青色微砂層となる。第Ⅷ層から第Ⅸ層は一連のも



第2図 第32次調査遺構平面図 (S=1/50)



第3図 トレンチ南壁 S D-103 土層断面図 (S = 1/50)

ので、河川の氾濫による一時的な堆積と思われる。第Ⅰ層の上面がおそらく、弥生時代前・中期の遺構面となろう。第Ⅰ層はトレンチの東側では、黄褐色粘質土層に対応する土層になり、トレンチ東半が比較的安定した遺構面になりそうである。

以上のように、基本土層は単純な土層を示し、弥生時代では弥生時代前・中期と後期の二面の遺構面を確認した。

(2) 遺構

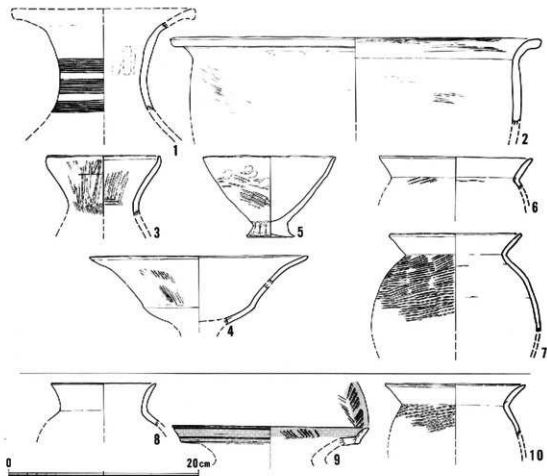
遺構としては3つの溝を検出した。トレンチの東端、中央、西端で各1条検出した。東端の溝を S D-101、中央を S D-102、西端を S D-103とした。

S D-101・S D-102

S D-101は溝幅0.5～0.6mの小溝、S D-102も溝幅1mに満たない小溝として検出したがトレンチ壁面が崩壊したため、詳細はわからない。S D-101からは第Ⅰ様式末頃の壺片を検出している。S D-102からは弥生時代中期前半の土器片を少量検出しているが、いずれも図示できる程の破片ではない。両溝とも遺物は少ないが、土器が示す時期でよいと思われる。

S D-103

S D-103は溝幅4m以上(推定6m)、深さ0.9mを測る大溝である。溝の東側のみ検出し、西側は調査範囲外となっている。溝内の堆積はほぼ単層で、黒褐色砂質土層で埋没している。これは、溝の肩となっている土層が砂質土層(第Ⅵ～Ⅷ層)であるため、流入して形成したのであろう。遺物は土器が少量出土している。出土土器から第Ⅴ様式後半の溝と考えられる。



第4図 SD-103及び包含層出土土器 (S=1/2)

3. 出土遺物

出土遺物としては少量の土器と数片のサメカイト剥片のみである。土器は各遺構から出土しているが、SD-103が最も多い。また、完形品はなく、破片の大きさも小さい。

SD-103及び包含層出土土器 (第4図)

第4図—1～7はSD-103、8～10は包含層から出土している。1・2は第Ⅱ様式の土器である。1は生駒西麓産の広口長頸壺である。頸部のみ破片で、3帯の櫛描直線文がめぐらされている。2は大鉢である。器壁の厚い土器で、口頸部はゆるやかに外反する。内外面にはハケ調整がみられる。3～10は第Ⅴ様式後葉の土器である。3は短頸壺の口縁部である。口縁端部は上方へ鋭く立ち上がる。内外面はミガキ調整をおこなう。4は高杯の杯部である。口縁部は大きく外反し、端部はわずかに面をもつ、外面にはミガキ調整がおこなわれている。5は碗形の鉢である。口縁部は無調整のまま、擬口縁状になっている。底部は指頭によってつまみ出している。

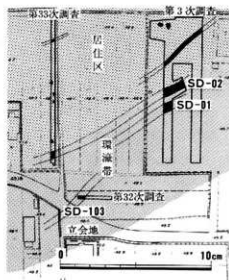
外面には左上がりのタタキがみられ、その一部は指頭によって消されている。6・7は中形の甕である。6には右上がりのタタキがみられる。7は球形の体部を有する。外面には細条のタタキが施されている。内面はナデ調整である。

8は短頸壺の口頸部片である。口縁端部は鋭い。9は尾張の搬入土器で、広口壺である。口縁部のみ少しの片であるが、内外面には赤色塗彩が残る。外面は不明瞭な2条の沈線、内面は櫛状工具による羽状文をめぐらす。10は中形の甕である。体部はあまり張らない形跡で、外面には右上がりのタタキが施されている。

4. まとめ

第32次調査は住宅新築に伴う小規模な調査であったが、弥生時代の各期の遺構を検出することができた。SD-101とSD-102は弥生時代前期末・中期前半の小規模な溝で、出土遺物が少ないながらも居住区が近隣にあることを示しているものと思われる。これに対し、弥生時代後期の大溝であるSD-103は環濠になるものである。これは第3次調査で検出したSD-01、SD-02の大溝が環濠であり、これらの延長線の外側に位置することからかなり外側の環濠になると推定される。このようなことから、この部分は環濠帯として認識してよからう。環濠帯の幅は最低50m程あるがさらに幅が広がるであろう。この環濠帯の内側には居住区が広がっている。第3次調査のSD-01がその境になる環濠でこれより内側では井戸や柱穴などが多数検出されている。

以上のことから、今回の調査地は環濠帯の一部を調査したことになる。小規模な調査ながら環濠の一つを検出し、周辺の状態を把握できたことは大きな成果となった。



第5図 第32次調査地点周辺の生活領域 (弥生時代後期)

Ⅲ. 第33次発掘調査の概要

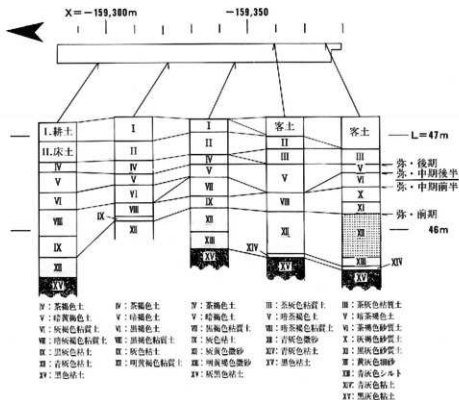
1. 調査の全容

第33次調査地は遺跡の南端部にあたり、第3次・32次につく南端の調査となった。銅鐸の鋳型やムラを囲む濠を検出した第3次調査の西60mにあたる。第33次調査は遺跡南端の範囲確認を目的として実施したため、南北に細長く98mにわたって発掘調査をおこなった。調査では、まず機械力をもって水田耕土層・床土層を除去し、その後、人力による調査を始めた。耕土や床土層を除去すると黒褐色土層の遺物包含層がトレンチ全面にあらわれ、当初の予想より遺構が広がっていることが窺えた。とりあえず、遺物包含層の除去を人力によって進めたが、酸化鉄が凝縮した土層の中に多量の土器を含んでいることや、この包含層で遺構面を確認しようとしたこと、さらには3面以上の遺構面に多数の遺構が検出されたことなど、これまでの調査では例をみない遺構数のため調査の進行は予想以上に遅れた。したがって、昭和62年度においてはトレンチの北半の遺構を中心に進め、一時中断の後、昭和63年度に改めて続行することになった。

調査では、弥生時代前期から古墳時代前期までの遺構をトレンチ全面において検出した。特に弥生時代前期の微高地の形成と遺構の関係(ムラと水田の関係)、さらには弥生時代中期の大集落への過程などが遺構の変遷からおさえられた。トレンチ南端で検出した大溝は中期段階の環濠になるとわれ、遺跡の範囲を知る上でも当初の目的が達成できた。遺物はこれまでの調査に比して多いが、注目されるものとしては細形銅矛片を確認し、重要な成果となった。



写真1 第33次調査現地説明会風景



第6図 第33次調査基本土層関連図 (S = 1/40)

2. 遺構

(1) 堆積土層

第33次調査地は遺跡の南端にあたることを南北98mにわたって調査したが、詳細な堆積土層の観察によって、この調査区が南東から北西にのびる小さな微高地を縦断していることが判明した。この微高地は長軸およそ200m、短軸100m程の規模と思われ、調査区南側に推定される河川の洪水堆積物によって形成されたと考えられた。これはトレンチ南端にみられる第XII層：黄灰色細砂層が北へいくほど漸的に微砂から粘土層に変化していっていることから判断された。また、この黄灰色細砂層には第一様式の土器を含んでいることや第XII層上面で第一様式木から第二様式の遺構が検出される点から、この微高地は第一様式の時期幅の中で形成されたと考えられた。この微高地は北側へ低くなり、約0.5mの比高差をもつが、第二様式内にはほぼ埋没してしまい(第VI層～第XI層)弥生時代中期前半段階の遺構面が形成される。その後、さらに微高地の平坦化が進行し、第VI層・第VII層が形成され弥生時代中期後半の遺構が掘削されることになる。このような平坦化の現象はムラ内部で進行したと思われ、ムラの統合・拡大の一因になっている。第V層上面では弥生時代後期から古墳時代前期の遺構、第III層・第IV層上面では中世素掘溝の遺構を検出している。以上のように本調査区においては、大きく五つの遺構面を確認した。

第3表 第33次調査主要土坑一覽表

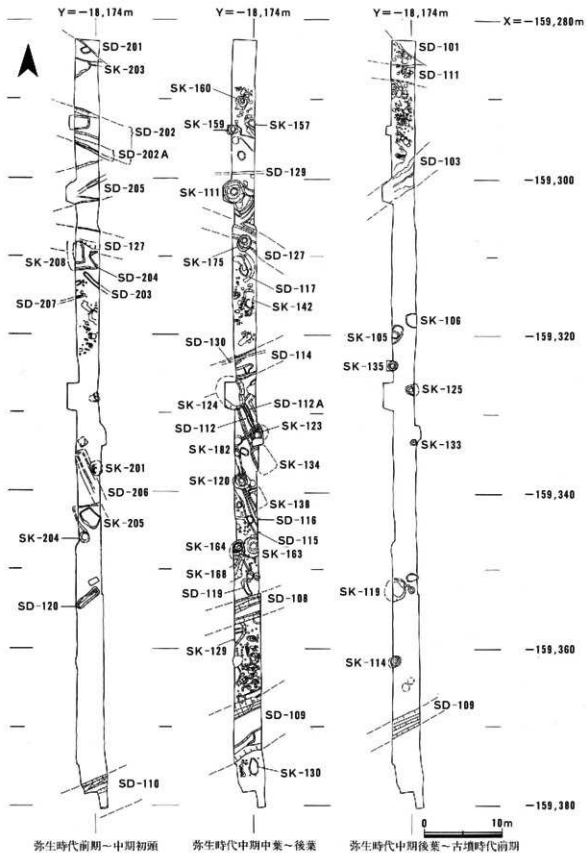
土坑番号	平面形態	断面形態	床面形態	坑底土層	規模(m)			坑底標高	時期 最内層式	主要遺物	備考
					長軸	短軸	深さ				
SK-105	楕円形	逆台形	平頂	青灰色 微砂	0.9以上 (1.2)	0.9	1.0	45.6	五		
SK-106	円形?	浅い 逆台形	平頂	黒褐色 粘質土	径1.9	—	0.3	46.2	庄内式		
SK-111	楕円形	二段の 逆台形	皿状	黒粘	3.0	2.7	2.25	43.8	三	木戈	
SK-114	楕円形	二段の 円筒形	円形	青灰色 粘上	1.4以上 (1.9)	1.35	2.1	44.45	五	広口葺5点	井戸
SK-120	楕円形	上部漏斗状 下部円筒形	平頂	灰白色砂	2.2	1.9	1.6	44.9	四	勾玉	井戸
SK-123	楕円形	逆台形	平頂	暗青灰色	1.8以上 (2.3)	(2.1)	1.35	44.7	三	手形粘土製品	井戸
SK-124	楕円形	逆台形	平頂	灰黑色 粗砂	4.0以上 (4.5)	2.7以上 (3.3)	1.0	45.3	三	灰瓦片・青瓦片 黒杯土製品	木器 貯蔵穴
SK-125	不整形円	円筒形	平頂	黒粘	径1.7		2.5	43.95	五	完形土器群	井戸
SK-130	不整形円	浅い 逆台形	平頂	粗砂	2.1	1.2	0.15	46.3	三	高杯	土器群
SK-133	円形	円筒形	皿状	灰黑色 粘土	0.85以上 (1.0)	—	1.4以上 (2.0)	44.45	五	完形土器群	井戸
SK-134	長方形	逆台形	平頂	灰青色 微砂	3.0以上	1.2以上	0.6	45.3	三	原形 又粘土製品	木器 貯蔵穴
SK-135	円形	上部漏斗状 円筒形	平頂	青灰色 微砂	径1.25	—	1.8	44.6	五		井戸
SK-138	長方形	逆台形	平頂	青灰色 粘質土	2.6以上 (3.0)	1.4	0.4	45.6	三		木器 貯蔵穴
SK-159	円形	上部漏斗状 円筒形	平頂	黒褐色 粘土	径1.5		1.7	44.7	四		井戸
SK-160	方形	二段の 逆台形	皿状	青灰色 粘上	1.7	1.5	0.7	45.6	三		
SK-163	円形	逆台形	平頂	砂	径2.8	—	0.9	45.4	二?		
SK-164	楕円形	円筒形	皿状	灰黑色 粘上	2.6	1.5以上 (2.0)	2.5	44.0	三		井戸
SK-168	方形?	逆台形	平頂	灰黑色 粘上	1.0以上 (1.2)	—	1.3	45.3	三		井戸

土坑番号	平面形態	断面形態	床面形態	坑底土質	規模(m)			坑底標高	時期 (墓内様式)	主要遺物	備考
					長軸	短軸	深さ				
SK-175	楕円形	二段の 逆台形	平坦	灰粘	2.2以上 (2.8)	1.7以上 (2.5)	1.6	44.45	二		井戸
SK-182	円形	円筒形	平坦	灰粘	径0.6	—	0.9	45.4	三		
SK-204	円形	逆台形	平坦	灰黒色 粘土	径1.2	—	0.5	45.7	—		
SK-208	長方形	逆台形	平坦?		4.0以上 (4.4)	2.0以上 (3.0)	1.0?	45.1?	—	長柄鍬・広 鍬未成品	木器 貯蔵穴

() は推定規模

第4表 第33次調査主要溝一覧表

溝番号	規模(m)		溝底 標高	走行方向	纏繞時期					主要遺物	備考	
	幅	深度			(墓内様式)							
					一	二	三	四	五			百匁 庄内 留
SD-103	2.6	0.4	47.2	北東—南西						←		
SD-108	3.4	1.2	45.1	東北東—西南西		→						
SD-109	7.0	1.2	45.4	東北東—西南西				←	→		土器群・銅鍬	
SD-110	(6.0)	1.8	44.8	北東—南西	←	→					長柄鍬	
SD-112	1.4	0.7	45.6	南南東—北北西		→						
SD-114	3.2	0.7	45.8	東北東—西南西		→					管玉・ガラス玉	
SD-115	0.8	0.4	46.1	北北西—南南東		→					土器群	SD-116を切る
SD-116	0.4	0.4	45.9	北北西—南南東		→						
SD-120	(1.3)	1~ 0.65	45.3~ 45.7	北東—南西	→						銅牙片	収束する 延長3.5m
SD-127	約3.2	1.5	44.7	南東—北西	←	→						
SD-202	4.4	1.6	45.9	東北東—西南西		→					卜骨・広楕・方形容器	SD-202Aを切る
SD-202A	0.8	1.0	46.3	東北東—西南西		→						
SD-205	5.0	0.7	45.3	東北東—西南西	→						広楕未成品	浅い落ち込み



第7圖 第33次調査遺構平面図 (1/500)

(2). 弥生時代前期の遺構

弥生時代前期の遺構としては、上坑・柱穴・大溝・小溝などがあり、トレンチ全面において検出された。上坑・柱穴・小溝はトレンチ中央で、大溝はトレンチ北端と南端で検出している。これはトレンチ中央部が微高地の為、居住区となり、それを囲むように大溝がめぐらされているようである。各遺構の時期は第一様式の中葉から末にかけて多く、特に第一様式末の遺構が多い。これらの中には第一様式と第二様式の土器が共存するものがある。ここでは、第一・第二様式の土器が共存するものも含めて説明することにする。

SK-208

SK-208はトレンチ中央やや北側で検出された大形土坑である。長方形を呈するが、約半分は調査区外にひろがっている。また、土坑の北側はSK-175とSD-127によって切られているため、土坑の形態が判断される場所は少ない。推定長軸4.4m、短軸3.0mほどの規模を有す。土坑中段でテラスをもち二段掘りの上坑となる。深さ1mほどになると思われるが底は確認していない。SK-208の南東隅はSD-204に接続している。堆積土層は大きく4層積される。上層は暗灰色粘質土層や炭灰層・植物層が10cm前後で薄く堆積している。中層は土坑の肩部に堆積している灰色粘土層、下層は土坑のテラス部分に堆積している灰褐色粘土層である。最下層は青灰色粘土層で土坑底部ちかくに堆積している層である。遺物は土器と木製品が多い。特に土器は上層である植物層からまとまって出土している。木製品は中層と下層上部に多い。中層では広楕や容器片が出土している。下層上部では長柄鋤2つと広楕1つが並んで出土した。これらの木製品はいずれも未成品で、テラス部分にのるような状態で出土した。また、この長柄鋤の下からも円盤状の容器未成品が出土した。

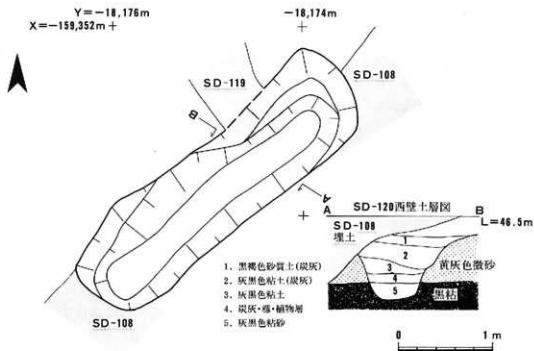
本上坑の時期は第一様式末である。その性格としては、木器の貯蔵穴が考えられるが、土坑の上層では土器等遺物の廃棄穴として機能が変化したようである。

SD-110

SD-110はトレンチ南端で検出した大溝である。大溝の北側を検出したのでさらに南へ一部拡張し、規模確認に努めたが南側は調査区外となった。調査では大溝の北側から中央部までを確認した。東北東から西南西方向に主軸をもつ。推定幅6m、深さ1.8mを測る。大溝は弥生時代前期の洪水堆積層(灰白色粗砂層等)を切って掘削されているため、大溝の堆積上は10~20cmの薄い砂質土や粗砂・微砂等の砂を主体とする層が多く、また、粘質土や粘土との互層になっているところも多い。遺物は土器や木片が多い。長柄鋤の破損品が溝底ちかくの暗灰色粘土層(植物混じり)から出土している。大溝の時期は第一様式末で、最終埋没は第二様式頃と思われる。

SD-120

SD-120はトレンチ中央やや南側で検出した遺構である。検出当初、溝になると思われたが、両側が収束しており、土坑ともとれる遺構となった。本遺構は上面をSD-108によって削平され、また、北側の一部はSD-119によって切られているが、ほぼ全容のわかるものである。規



第8図 SD-120 遺構平面図及び土層断面図 (S = 1/40)

横は現長軸3.5m, 現幅0.9mを測る。北東から南西方向に主軸をもつ。遺構の底面は北東から南西方向に傾斜し、南西側が約0.35cm低くなっている。堆積土層は5層に分かれる。第1層：黒褐色砂質土層(炭灰)、第2層：灰黒色粘土層(炭灰)、第3層：灰黒色粘土層、第4層：炭灰と糠・植物層、第5層：灰黒色粘砂層である。いずれも10~20cmの堆積土層である。大別すると第1~3層、4層、5層の三つにわかる。遺物は土器小片が出土している。注目される遺物としてノミに転用された細形銅矛片がある。これは第4層の植物層内から検出した。小片の為、調査中には確認できなかった。時期は第一様式と第二様式の土器が共伴しており、土層の堆積状況等からはほぼ一時期の土器としても良いと思われる。遺構の性格は不明。

SD-202

SD-202はトレンチ北端で検出した大溝である。東南東から西北西に主軸をもつ。大溝の底には弥生時代前期と思われる土坑があり、これを切って掘削している。また、大溝の南側にもSD-202Aがあり、この溝の北肩をも切っている。SD-202の規模は幅4.4m、深さ1.6mを測る。堆積土は大きく3分され、いずれも灰黒色や灰色粘土等で埋没している。中層では、灰黒色粘土層で植物腐植土層となっている。この土層からは多量の木片とともに、方形容器や高杯脚部、広楕などの木器が出土している。溝は第一様式末から第二様式である。

(3) 弥生時代中期の遺構

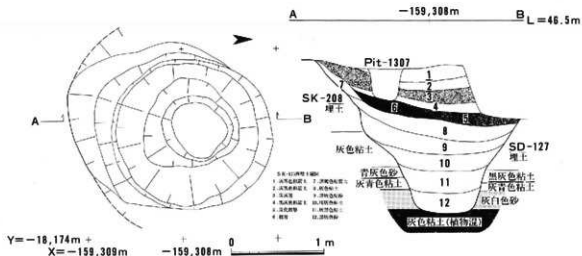
弥生時代中期の遺構としては、土坑・柱穴・大溝・小溝・土壌墓などがある。遺構はトレンチ全面において、かなりの重複をもって検出した。この時期の遺構が今回の調査では最も多い。柱穴や井戸も全面において検出したため、全体が居住区と考えてよからう。また、遺構の時期も空白期がなく、連続と生活領域になっていたと思われる。

SK-123

SK-123はトレンチ中央部で検出した大形土坑である。上面はSD-112・SD-112Aに、また、南肩はSK-133によって切られている。現長1.8mを測るが、復元すれば2.1×2.3m前後の楕円形になる。深さ1.35mを測り、土坑の断面形態は逆台形を呈す。土坑の堆積は7層にわかれ、第1・2・4～6層はいずれも黒色や灰黒色などの粘土層、第3層は植物層、第7層は黒色粘質微砂層である。第7層は流れ込みによって形成されたものであろう。遺物は第2～4層の各層と第7層において多く出土した。第2～4層は大形土器片が多い。第2層では石小刀と思われる石器を装着した木製品や図版46-1にみるような木製品が出土している。また第4層では手斧の柄の未成品1点、先端を尖らせた用途不明の棒、篋片が土坑の東と西よりにわかれて出土した。第7層ではイノシシの上顎骨等がかなりまとまって出土している。その他、稲の穂東片も検出されている。本土坑の性格はその平面および断面形態より井戸と思われるが、その埋没過程では遺物の廃棄坑になったのであろう。土坑の時期は第二様式である。

SK-175

SK-175はトレンチ中央やや北側で検出した大形土坑である。SD-127やSK-208の遺構を切って掘削されている。現長2.2mを測るが、復元すれば2.5×2.8m程の楕円形プランの土坑にならう。深さは1.6mを測る。土坑の断面形態は二段の逆台形を呈する。土坑の堆積土は



第9図 SK-175 遺構平面図及び土層断面図 (S=1/50)

12層に細分されるが、大きくは四つにわかれる。上層は灰黒色粘質土(第1・2層)、中層は炭灰層や糠層(第3～6層)、下層は灰色粘土や黒灰色粘砂(第7～11層)、最下層は黒灰色砂(第12層)である。最下層は土坑掘削直後の流れ込み層である。上層と下層は自然堆積土層、中層は人為的な廃棄に伴うものであろう。遺物は第6層から木製高杯脚部、第8層から大形土器片がまぎって出土した。本土坑はその平面及び断面形態から井戸と思われる。土坑の時期は第一様式古段階である。

S K-164

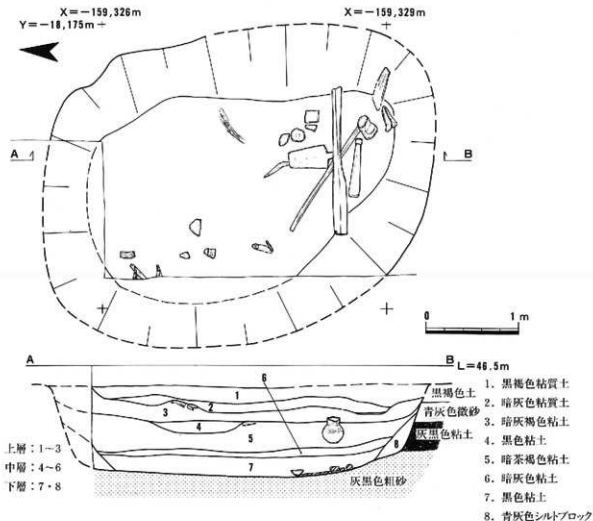
S K-164はトレンチ中央やや南側で検出した大形土坑である。土坑上面西側はトレンチ外にひろがっている。長軸2.6m、短軸推定2mを測る楕円形プランの土坑である。深さは2.5mを測る。土坑の断面形態は円錐形を呈すが、上部はさらに漏斗状にひろく。土坑としては整った形態の土坑といえよう。土坑の堆積土は土坑の上部まで灰黒色粘土等で埋没しており、ほとんど単一層にちかものである。このような状況のためか遺物は少ない。本土坑はその平面や断面形態から井戸と思われる。土坑の時期は第二様式古段階である。

S K-168

S K-168は前述 S K-164の南側で検出した大形土坑である。土坑の西半分は調査区外にひろがっている。一辺1.8m前後の方形にちか形を呈すが、その北東隅は長さ1.8mにおよぶ溝状遺構(S D-124)に接続している。土坑・溝とも深さは1.3mを測る。土坑の断面は逆台形を呈す。土坑の堆積土は大きく四分される。上層は茶褐色土層等で土器片を多く含んでいる。中層は黒褐色粘質土等で遺物は少なくなるが、土坑中央部の中層上位では広口長頸壺の口頸部を欠いた胴部が傾転した状態で出土した。下層は黒褐色粘砂層、最下層は灰色粘土層である。これらの層では遺物は少ない。本土坑は広口長頸壺が供獻土器のように投棄されている点から井戸とも考えられるが、S D-124のような収束する溝がとりつく点など、やや別の性格を有する余地もある。本土坑の時期は第三様式古段階である。

S K-134

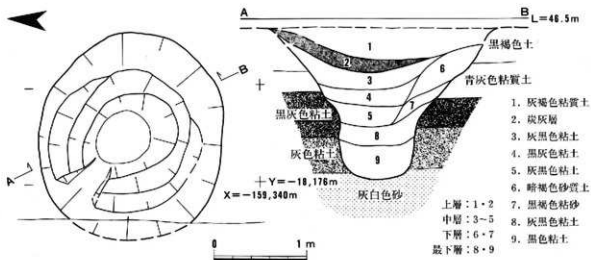
S K-134はトレンチ中央、前述 S K-123の南側にあたるところで検出した大形土坑である。長方形プランの土坑であるが、二側辺を検出したのみで土坑の約半分を調査した。長軸3m以上、短軸1.3m以上を測るが、ほぼ同規模の土坑と思われる。土坑の主軸は南南東から北北東にあり、微高地の主軸と並行するようである。土坑の深さは1.2mを測る。土坑の堆積は大きく三分される。上層は暗褐色粘質土層等、中層は暗灰黒色粘土層(糠殻合)や暗茶褐色粘土層(植物層)、下層は灰黒色粘土層である。遺物は下層から着柄の又鋤米成品1点と原材2点が出土した。本土坑はその形態や下層の遺物出土状況から木器の貯蔵穴と考えられる。土坑の時期は第三様式古段階である。S K-134と同様の土坑としては、S K-134の南4mで主軸と並行するように S K-138が検出されている。また、S K-138の南5mでは円形大形土坑 S K-163が検出され、いずれも第三様式古段階である。このようにこの地区には木器貯蔵穴が群在するようである。



第10図 SK-124 下層遺物出土状況図及び東壁土層断面図 (S=1/6)

SK-124

SK-124はトレンチ中央で検出した大形土坑である。調査当初、土坑の東肩のみ検出したが、大形木材片が多量に出土した為、西側に拡張し土坑の全容を把握するように努めた。その結果、土坑の三分二を調査することができた。土坑は現長4mを測るが、推定長軸約4.5m、短軸約3.3mほどの楕円形プランになる。深さは約1mを測る。土坑の主軸は南南東から北北西方向で前述のSK-134の延長上になる。SK-124はSD-112・112AやSD-114を切って掘削されている。土坑の堆積土は大きく三分される。上層は黒褐色粘質土層等、中層は暗茶褐色粘土層(植物層)、下層は黒色粘土層である。遺物は中層と下層から多量に出土した。中層では、長さ2m前後の割材が土坑の肩部から中央に向かって出土した。また、このような割材の他に木製四脚容器や胴部を穿孔した大形細頸壺、流水文を描いた把手付鉢などが出土した。下層では土坑



第11図 SK-120 遺構平面図及び北壁土層断面図 (S=1/6)

の南東部側に遺物が集中していた。遺物としては着柄鋤や長柄鋤、高杯の未成品、割材、堅杵の破損品などの木製品、イノシシの下顎骨、土器片などが出土した。これらの木製品は土坑の底ちかくから出土していることから、本土坑は木器貯蔵穴と考えられる。土坑の時期は第三様式の新段階である。

SK-111

SK-111はトレンチの北端で検出した円形土坑である。調査当初、土坑の東半分が検出されたが、西へ拡張し全容を明らかにした。長軸3m、短軸2.7mを測る円形にちかい楕円形の土坑である。深さは2.25mを測り、その断面形態は二段の逆台形を呈す。土坑中位にテラスをもつ。土坑の堆積は大きく6層に分層される。第1層：灰黒色粘質土層、第2層：灰黒色粘土層、第3層：植物腐植土層、第4層：椀層、第5層：灰黒色粘質土層、第6層：黒色粘土層である。第4層の椀層は厚いところで0.5mもあり、多量の椀殻が廃棄されている。また、第3層の植物腐植土層内には多量の自然木が投棄されていた。遺物は第4層から第6層にかけて多くの土器片を検出している。注目される遺物としては、第3層から円錐形の鹿角製品、第4層の上面から木製叉が出土している。土坑の性格はその平面及び断面形態から井戸と考えられるが、土坑の埋没過程で祭祀遺物の廃棄穴となったと思われる。時期は第三様式末である。

SK-120

SK-120はトレンチ中央部で検出した大形土坑である。SD-115・SD-116を切って掘削されている。長軸約2.2m、短軸1.9mを測る楕円形の土坑である。深さ1.6mを測り、その断面形態は土坑下位が円筒形、上位が漏斗状にひろく。土坑の堆積は大きく四分される。上層は灰褐色粘質土層と炭灰層、中層は灰黒色粘上層や黒灰色粘上層、下層は暗褐色砂質土層等、最下層は灰黒

色粘土層である。遺物は上層の炭灰層から中層上位にかけて多量の上器を検出した。特に中層では、脚部を欠き底部を穿孔した台付鉢が出土した。また、下層では勾玉1点が出土した。土坑の性格はその平面・断面形態から井戸と思われ、底部を穿孔した台付鉢は供献土器と考えられる。土坑の時期は第四様式である。

S K-159

S K-159はトレンチ北端で検出した大形土坑である。直径約1.5mを測る円形プランの土坑である。土坑は深さ1.7mを測り、その断面形態は円筒形を呈し、上部は漏斗状にひろく。土坑の堆積は大きく四分される。上層は黒褐色土層等、中層は炭灰層や暗灰色粘土層、下層は植物層、最下層は灰黒色粘土層である。最下層は約0.8mの堆積で厚い。遺物は少ないが、双頭渦文のタキをもつ土器片等が出土している。土坑の性格はその平面・断面形態から井戸と思われる。時期は第四様式である。

S K-130

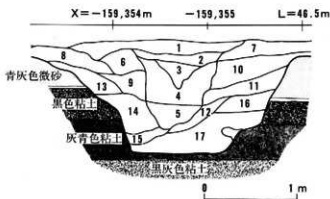
S K-130はトレンチ南端で検出した土坑である。S D-109とS D-110の間で検出している。長軸2.1m、短軸1.2m、深さ0.15mを測る浅い楕円形プランの土坑である。土坑の埋土は砂質土層を掘削している為、暗灰褐色砂質土となる。本土坑の北側上面から杯部を穿孔した高杯が出土した。また、土坑底ちかくから人の歯と思われるものが出土したことから、本土坑は土壙墓と思われる。高杯は供献土器であろう。土壙墓の時期は第三様式古段階である。

S D-114

S D-114はトレンチ中央で検出した大溝である。溝幅3.2m、深さ0.7mを測り、東北東から西南西方向に軸をもつ。溝の堆積は大きく二分され、上層は黒褐色粘質土層等、下層は灰黒色粘土層等である。遺物は土器が多いが、その他、ガラス小玉や碧玉製管玉も出土している。溝の時期は第三様式である。

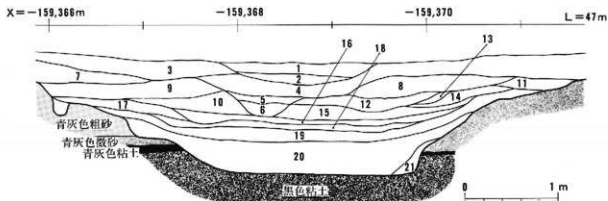
S D-108

S D-108はトレンチの南方よりで検出した大溝である。溝幅3.4m、深さ1.2mを測り、東北東から西南西方向に軸をもつ溝で幅に比べ深く、その下部は急な角度をもって掘削している。溝の堆積は大きく三分される。上層は黒灰色粘質土層や灰黒色粘砂層等、溝浚えあるいは再掘削時の堆



- | | | | |
|----------|-----------|-----------|------------|
| 上層：1-5 | 1. 黒灰色粘質土 | 7. 灰黒色粘質土 | 13. 黒灰色粘質土 |
| 中層：6-15 | 2. 灰褐色粘質土 | 8. 黄灰色砂 | 14. 黒灰色砂 |
| 下層：16・17 | 3. 灰黒色粘質土 | 9. 灰黒色粘砂 | 15. 灰黒色粘質土 |
| | 4. 灰黒色粘砂 | 10. 灰黒色粘土 | 16. 黒灰色粘土 |
| | 5. 黒灰色粘質土 | 11. 灰黒色粘土 | 17. 黒灰色粘土 |
| | 6. 灰褐色粘質土 | 12. 灰黒色粘土 | |

第12図 S D-108 東壁土層断面図 (S = 1/6)



上層：1~7	1. 灰褐色粘土	6. 黒灰色砂	11. 黒灰色粘質土	16. 灰黒色粘土
中層：8~15	2. 灰褐色粘土	7. 暗茶褐色土	12. 灰黒色粘土	17. 灰黒色粘砂
下層：16~19	3. 黒褐色土	8. 黒灰色土	13. 黒灰色砂	18. 灰黒色砂
最下層：20・21	4. 黒灰色粘質土	9. 8に同じ	14. 黒灰色粘質土	19. 黒灰色粘質土
	5. 黒灰色粘砂	10. 黒灰色粘質土	15. 黒灰色粘砂	20. 黒灰色粘土

第13図 SD-109 東壁上層断面図 (S = 1/6)

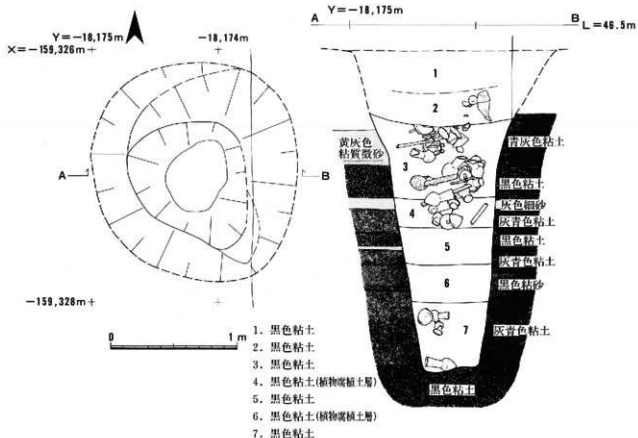
積である。中層は灰黒色粘質土層や灰黒色粘砂層等で溝の肩部から流れ込みで形成した層であろう。下層は黒灰色粘土層等である。遺物は土器が上層を中心に出土したが、他の遺物は少ない。本溝はその位置と方向から環濠の性格をもっていたと考えられる。溝の時期は第三様式新段階である。

SD-109

SD-109はトレンチ南端、前述SD-108の南10mで検出した大溝である。溝幅7m、深さ1.2mを測る。溝の方向はSD-108と同じで並行している。溝の堆積は大きく四分される。上層は黒灰色粘質土層や黒灰色粘砂層等で溝浚え後の堆積層である。中層は灰黒色粘土層や黒灰色粘砂層等で10cm前後の薄い層で形成されている。下層は灰黒色粘土層や灰黒色粘砂層で基本的に中層と同様の形成層である。最下層は黒灰色粘土層で40cm前後の厚い層である。遺物は上層から下層にかけて土器が多量に出土した。上層は細片が多い。中層から下層では完形品を含む大破片が出土した。また中層からは鋼鐵1点が検出された。最下層では堅柱片がみついている。本溝はその位置と方向から環濠と思われる。溝の時期は最下層が第四様式、下層から中層が第五様式前半、上層が第五様式後半である。

SD-115

SD-115はトレンチ中央で検出した小溝である。溝幅0.8m、深さ0.4mを測り、南南東から北北西に軸をもつ。溝の堆積土は第1層：灰褐色土層、第2層：灰色粘質土層である。遺物は土器が兩層から出土している。本溝は微高地稜線上に掘削されている。時期は第三様式末である。



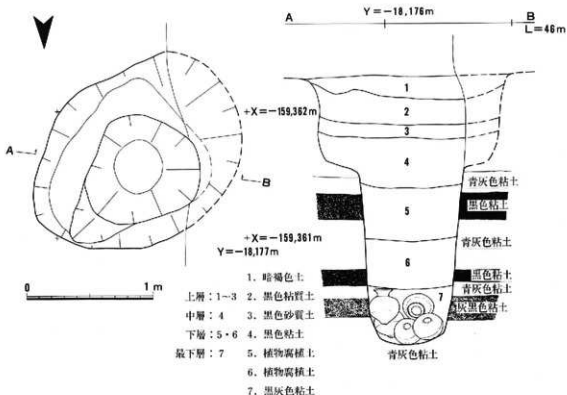
第14図 SK-125 遺構平面図及び北壁上層断面図 (S = 1/50)

(4) 弥生時代後期の遺構

弥生時代後期の遺構としては、土坑・柱穴・大溝などがある。遺構はトレンチ全体にわたるが、密度は中期に比べて疎である。トレンチ北端では柱穴が多く、中央部では井戸が目立つ。大溝はトレンチ北端と南端で2条検出している。弥生時代後期では、微低地部分がなくなり、全体に安定した土地環境になっていたようで全面が居住区と考えてよからう。

SK-125

SK-125はトレンチ中央部で検出した大形土坑である。土坑の東肩の一部は調査区外になるが、ほぼ全容のわかる土坑である。土坑は径1.7m前後の円形の土坑である。深さは2.5mを測る。土坑の断面は円筒形を呈す。土坑の堆積は7層に分層されるが、全て黒色粘土層である。その中で第4層と第6層が植物腐植土層となる。遺物は第3・4層と第7層から完形土器を中心に多く出土した。第4層の土器はその出土状況から基本的には第3層の遺物と一連のものと考えられ、兩層で長頸壺を主体に30点あまり出土した。第7層では、その上位で完形長頸壺2点と甕1



第15図 SK-114 遺構平面図及び南壁土層断面図 (S=1/50)

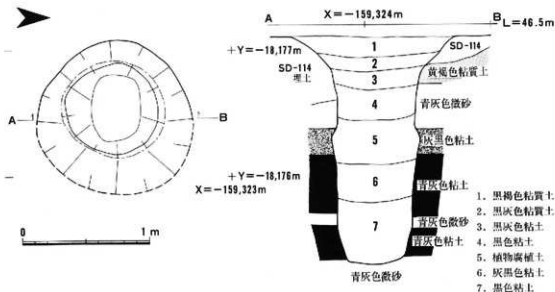
点、高杯脚部片が、また、下位で土坑底から長頸壺1点が出土した。他に完形土器とともに板片や植物遺体が出土している。本土坑はその形態から井戸と判断され、多量に出土した完形土器群は井戸掘削時・埋没時の供献土器と思われる。土坑の時期は第五様式前葉である。

SK-133

SK-133は前述SK-125の南6mで検出された大形土坑である。土坑上面は溝などが切り合っており、約0.5m掘り下げて検出できた。推定復元すれば、径約1m、深さ約2mの円形の土坑になる。土坑の断面は円筒形にちかいが、底付近は円錐形になる。土坑の堆積は大きく三分される。上層は黒色粘土層、中層は黒色粘質土層、下層は灰黒色砂質土層や粘砂層である。遺物は上層から半完形の長頸壺や鉢・高杯が5点、中層から完形の長頸壺3点が出土した。本土坑もその形態から井戸と考えられ、完形土器は供献土器であろう。時期は第五様式中葉である。

SK-114

SK-114はトレンチの南端で検出した大形土坑である。推定長軸1.9m、短軸1.35mを測る楕円形プランの土坑である。深さは2.1mを測る。土坑の断面形態は土坑上段部でテラスをもち二段の円筒形を呈する。土坑の堆積は大きく四分され、上層は暗褐色土層や黒色粘質土層等、中層は黒色粘土層、下層は植物腐植土層、最下層は黒灰色粘土層である。下層は0.8mにおよぶ厚い



第16図 SK-135 遺構平面図及び西壁土層断面図 (S = 1/50)

堆積層である。遺物は土器が多い。中層からは完形の鉢1点、最下層の土坑底からは完形広口壺5点が出土した。この広口壺内にはネズミやカエルの骨が入っていたものもあった。この他、土器片や小動物骨は下層上位で多く検出している。本土坑はその形態から井戸と判断され、最下層の遊群は供献土器と思われる。時期は第五様式の後葉である。

SK-135

SK-135はトレンチ中央、前述SK-125の北西7mで検出した大形土坑である。トレンチを西に拡張し、全容を明らかにした。径1.25m、深さ1.8mを測る円形プランの土坑である。土坑の断面形態は円筒形を呈すが、上部は漏斗状にひろく。土坑の堆積は7分層される。第1層：黒褐色粘質土層、第2層：黒灰色粘質土層、第3層：黒灰色粘土層、第4層と第7層は黒色粘土層、第5層：植物腐植土層、第6層：灰黒色粘土層である。遺物は各層に土器細片が含まれている程度で少ない。第4層では石製円球1点が出土している。本土坑はその形態から井戸と考えられる。土坑の時期は第五様式中葉である。

SD-103

SD-103はトレンチ北端で検出した大溝である。SD-205やSK-111を切って掘削している。溝幅約2.6m、深さ0.4mを測る浅い溝である。溝は北東から南西方向に軸をもつ。溝の堆積は2層に分層され、上層は黒褐色土層、下層は黒褐色粘質土層である。上層は土層内に鉄分が凝縮し、非常に固い層となっておりその中に土器片を多く含んでいた。土器は細片になっているものが多。本溝はその位置から区画溝と考えられる。時期は第五様式である。

3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、遺構ごとに比例して遺物箱数約500箱という膨大な量である。土器が最も多く、その他石器・木器・金属器・骨角器等の人為物、また、動物骨や種子類などの自然遺物も含まれている。自然遺物については、井戸などの土坑内の堆積土を洗浄した結果、小動物骨など良好に検出している。ここでは、これらすべてについて触れられないので、土器編年上重要と思われる資料を中心にその他木器など重要遺物を加えて報告する。したがって、遺物全体及びその詳細については後日の正式報告によらねたい。

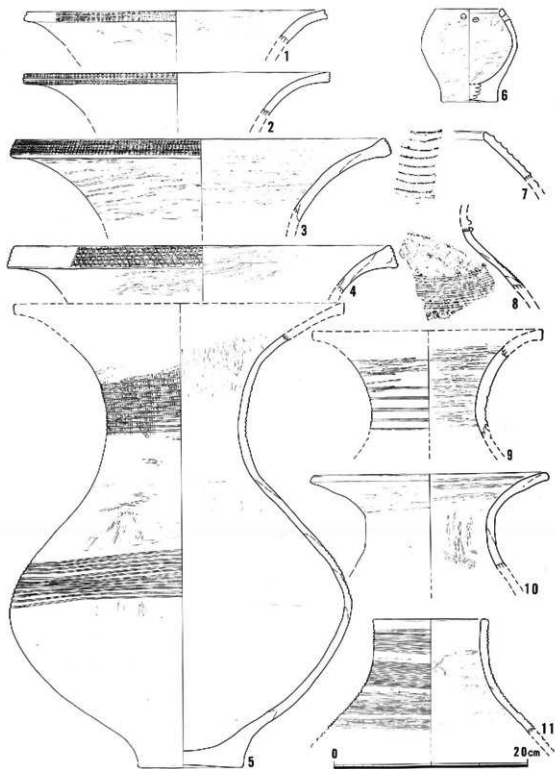
(1). 土器

土器は弥生時代前期から中世におよぶ時期のものがある。特に弥生時代前期から弥生時代後期の土器が多いが、なかでも中期の土器が最も多く遺構から良好な状態で出土している。弥生時代後期の土器は井戸から完形土器が多数検出されている。古墳時代から中世の土器は非常に少ない。以下、出土した遺構ごとに土器の説明をおこなうことにする。

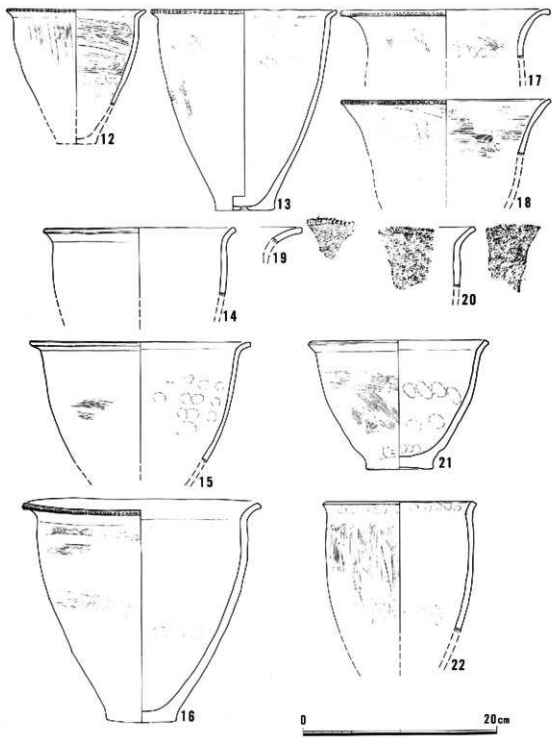
SK-208出土土器(第17～19図)

SK-208からは比較的多くの土器を検出している。特に上層下位の植物層(第17図-1～3、5・7・8、第18図-16・17、第19図-24・25)と下層の灰褐色粘土層(第18図-14・15・22、第19図-23)から出土したものが多く、この植物層と灰褐色粘土層は層序の上下に位置しているため、両層間で接合するものがある(第17図-9～11)。最下層から出土したものは第17図-4・6、第18図-21である。下層下位では第18図-18、上層上位では第18図-12・13・19・20が出土している。これらの土器は各層から出土しているが、ほとんど時間的隔たりのない一群の土器と考えられる。

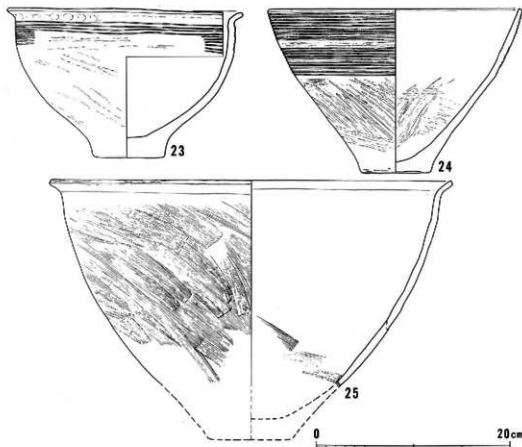
壺 第17図-1～5は広口長頸壺である。1～4は口縁部の破片である。これらはいずれも口縁端部が面をもち、3と4はさらに肥厚している。この端面には文様が施されている。1・2は1条のヘラ描沈線施文後、1はハケ原体による刻目、2はヘラ原体による上・下端の刻目を施す。3・4は5条のヘラ描沈線施文後、3は上段・中央・下段の三部位に刻目、4はヘラ描の斜格子文を施している。5は口縁部を除き、ほぼ完存する壺である。球形の胴部に大きく広がる口縁部がつく。外面はハケ後ナデをおこなうが、頸部間にはミガキ調整をする。頸部には11条のヘラ描沈線が右から左方向の螺旋に描かれている。胴部は12、13条のヘラ描沈線をめぐらす。頸部に比べ間隔は狭くやや粗雑である。頸部内面には縦位のミガキが施されている。6・7は無頸壺で、6は小形品である。7は胴部に細くて低い貼り付け突帯が7条以上めぐらされている。突帯は強いヨコナデが施されている。胎土や色調から搬入土器と思われる。8～10は広口壺である。8は胴部の破片で頸部には1条以上の貼り付け突帯がめぐらされ、突帯上は小さく刻目が施されている。胴部には15条のやや細めのヘラ描沈線がめぐらされている。9は頸部に間隔のあけたヘラ描沈線を4条描く。10は大きく外反した口縁部をもつ壺で無紋になるものであろう。11は直口壺で、



第17图 SK-208 出土土器1 (S=¼)



第18図 SK-208 出土土器 2 (S=4)

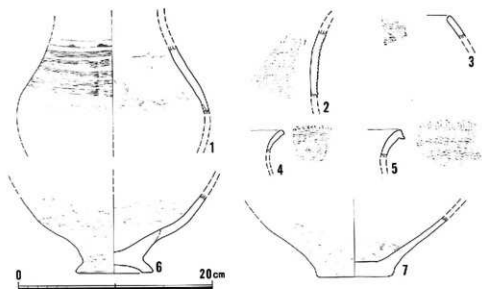


第19図 SK-208 出土土器3 (S=1/4)

口頸部から胴部を4帯に分けて7～9条のヘラ描沈線をめぐらしている。二次焼成を受ける。

■ 第18図-12～16は口縁部が強く外反する甕である。12は小形、13～16は中形の甕である。これらの甕は口縁部が短く、口縁端部の調整は粗雑である。12・13・16は口縁端部に刻目をもつ。内外面の調整はハケを残すものがあるが、ナデでハケを消すものが多い。いずれも外面には厚く煤が付着している。13は底部中央に焼成後の穿孔がみられる。17～20は口縁部がゆるやかに外反する甕で、口縁部は前者より長くのびる。20を除き、口縁端部にはハケ原体による刻目がめぐらされる。いずれも細条のハケ調整がみられる。19は口縁部内面に櫛描の波状文が描かれる。20は外面に縦位ハケ、口頸部内面に横位のハケが施される。この土器は胎土に砂粒が多く混在し在地のものとは異なる。

鉢 第18図-21・22、第19図-23～25は鉢である。21～23・25は口縁部が外反する鉢、24は口頸部が直口する鉢である。21は小形鉢でハケ後ナデ調整をおこなうがミガキがみられず、やや粗雑なものである。22は甕にちかい形態であるが、内外面にミガキをおこなうことから、一応鉢と



第20図 SD-120 出土土器 (S=ㄥ)

しておく。腹長の胴部で、口縁部は短く外反させ、端部は面をもつ。口縁部は指頭圧痕を残し、粗雑なつくりである。外面は炭化物が付着している。23は半球形の胴部を有するものである。口縁部下には10条のヘラ描沈線をめぐるが、その四分の一は意識的に4条のヘラ描沈線とし、下の6条は描かれない。24は底部から直線的に外へ広がる体部をもつ中形鉢である。体部には各々10条のヘラ描沈線が2帯めぐらされている。25は大形鉢である。外面には細条のハケ、内面はナデ調整が施される。

SD-120出土土器(第20図)

SD-120は細形銅牙片が出土した遺構であり、その所属時期を明らかにするために図を掲げることとする。本遺構から出土した土器は少ない。細形銅牙片は第4層から出土した。第4層の植物層から出土した土器は第20図-1・5と7である。6は第5層出土である。第4層から出土した土器はいわゆる第一様式と第二様式の土器がほぼ同数ある。

壺 第20図-1・3・7は壺である。1は広口長頸壺である。胴部には5条一単位の櫛描直線文が左から右へ描かれている。2も広口長頸壺である。頭部にはヘラ描直線文が20条以上描かれている。3は無頸壺である。胴部には6条一単位の櫛描直線文が描かれている。7は壺の底部である。底部裏面にはケズリがみられる。

甕 4・5は甕である。4は大和型甕の口縁部片で、口縁端部に刻目、内外面には粗いハケ調整がみられる。5は大形の甕である。口縁部は下方へ突出し鋭い。口縁端部は櫛による刻目がみられる。内面には2帯の櫛描波状文が描かれる。形態・文様から搬入土器と考えられる。

鉢 6は鉢の底部と思われる。底部は脚台となり、突出している。底部縁辺や裏面にはケズリがみられる。内外面にはミガキが施される。

SK-124出土土器(21-23図)

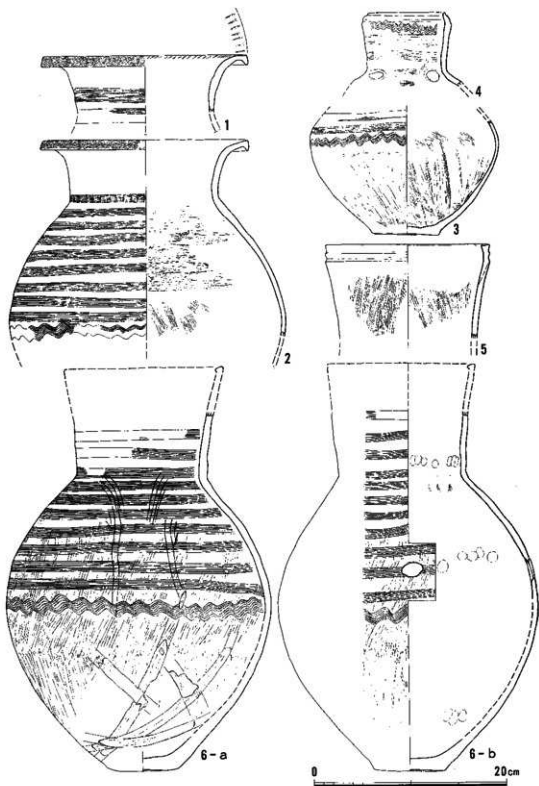
SK-124は大形土坑で多量の木製品に混在して土器が出土している。完形品は第21図-6に示す1点のみで、他は破片である。大半は中層から出土し、下層の上層は少ない。中層から出土した土器は第21図-1-3・6、第22図-7・9・11-13・15・16、第23図-17-19・21・22である。上層と中層で接合したものに第23図-20、中層と下層で接合したものに第22図-10・14がある。他は下層出土である。以上の土器はほぼ同時期の資料と考えられる。

壺 第21図-1-6は壺である。1-3は広口壺で、口頸部が大きく外反する。1・2は口縁端部が肥厚し、1ではハネ上げ口縁となる。1は口縁端部に櫛指波状文、内面に櫛指列点文、頸部に櫛指直線文を施す。2は口縁部に櫛指波状文、頭胴部界に櫛指簾状文、胴部に櫛指直線文と最下段に波状文を施す。2の壺には煤が付着し、煮沸したことがわかる。3は胴部から底部の破片である。胴部には櫛指直線文と波状文がみられる。胴部下半には太いミガキがおこなわれる。この壺もまた、煤の付着が著しい。

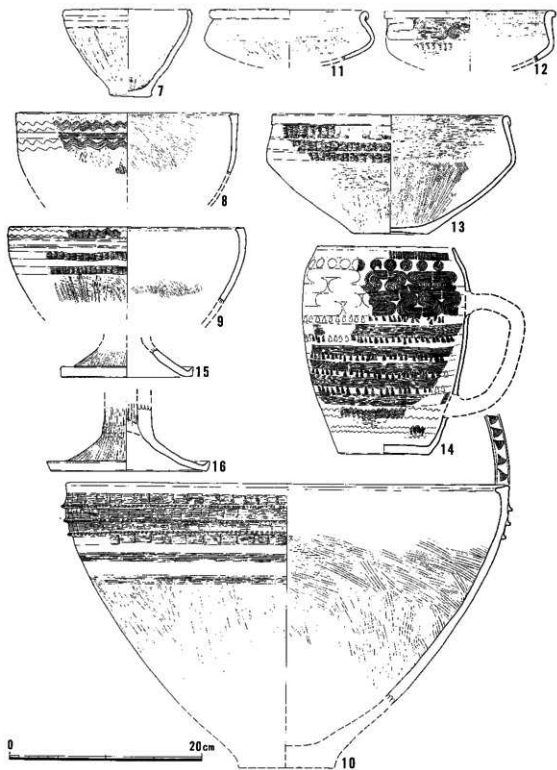
4は水差し形土器である。口頸部は内湾し、端部には凹線文によってやや尖りぎみになっている。把手は胴部に挿入して付けられている。文様は口頸部から2条の凹線文、櫛指波状文・直線文となるが、頸部の直線文2条は2帯の複合櫛指文となる。

5・6は直口壺である。5は口頸部がやや内湾する形態で、端部は面をもっている。口縁部にはやや深い凹線文が2条施されている。6は口頸部を欠くが、ほぼ完存する直口壺である。縦長の胴部に直線的にのびる頸部がつく。頸部から胴部にかけて櫛指直線文、最下段に波状文が描かれている。胴部下半にはミガキがみられる。胴部上半には鋭利な4本の条線がほぼ左右対象にみられる。これらの条線はその状況から犬などの小型四足獣に2回にわたってつけられた爪痕と考えられる。また、胴部下半には樹皮状のものが編んだように付着しており、編みかごと土器を包んでいたものと思われる。爪痕のはは反対側の胴部中央には1.6cm×2.2cmの楕円形の穴が穿たれている。

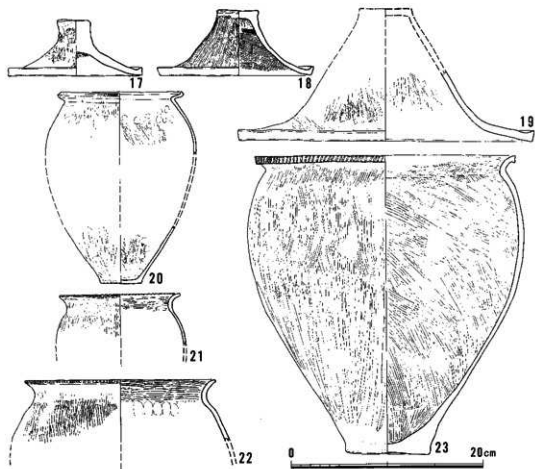
鉢・高杯 第22図-7-14は鉢である。7-10は碗形の鉢で、7は小形、8・9は中形、10は大形となる。7は口縁部に浅く幅広い凹線文とその下に細い凹線文を各々1条めぐらす。体部下半や底部にはケズリがみられる。体部下半ではその後ミガキ調整をおこなう。8は口縁端部が内側へ突出する。口縁部の下には2条の櫛指波状文とその間に直線文をめぐらす。9は口縁端部が内側へ肥厚するものである。口縁部下には2条の凹線文をめぐらした後、その上に櫛指波状文1条、また、その下に簾状文2条を施文する。これらの施文後、体部下半はケズリとミガキ調整をおこなう。10も口縁部が内側へ突出するものである。口縁部下に3条の貼り付け突帯をめぐらし、突帯上に刻目をおこなう。この貼り付け突帯間には櫛指簾状文と簾状文の下に櫛指直線文2条を施文する。また、口縁部上面には櫛指の扇形文を施す。体部下半はミガキ、内面は粗いハケ後ナデ調整をおこなう。11・12は付付鉢である。11・12ともに浅い鉢部である。11は口縁部を外へ折り曲げ、丸くなっている。この鉢は無文で、内外面をミガキ調整で仕上げる。12は口縁部を外



第21图 SK-124 出土土器 1 (S=1/4)



第22圖 SK-124 出土土器2 (S=1/4)



第23図 SK-124 出土土器 3 (S=1/4)

へ折り曲げるが、端部は面をもっている。体部には栴檀の横型流水文と扇形文を描いている。内外面はミガキ調整をおこなう。13は中形の鉢で脚台をもたないものである。口縁部は外方へ折り曲げ、鉢部に密着する。体部には栴檀簾状文3条をめぐらし、その間にミガキを挿入する。体部下半はケズリ後ミガキをおこなう。内面もミガキを施す。14は把手付鉢である。大形細頸壺の口頸部に似た形態で異形の鉢である。器壁は全体に薄い。口縁部は内行する。外面には上から栴檀簾状文1帯・円形文1帯・横型流水文2帯・扇形文と直線文が交互に5帯、波状文2帯が全面に描かれている。内面はハケ後ナデ調整をおこなう。

第22図-15・16は高杯あるいは台付鉢の脚部と思われる。15・16とも脚部が広がり、脚端部は上方へ突出する。両者とも外面はミガキ、内面はナデ調整をおこなう。16は脚部内面の柱状部を充填している。本土器は内面の裾部周辺に煤が付着していることから、上部欠損後甕の蓋として転用されたものである。

甕蓋・甕 第23図-17~19は甕蓋である。いずれも高杯の脚部に似た形態を呈す。裾部は上方へ突出している。17・18は中形、19は大型の甕に対応する。外面はケズリ後ミガキをおこなう。19の内面はミガキがみられる。いずれも蓋の内面には煤の付着がみられる。18は生駒西麓産と思われる。

第23図-20~23は甕である。20は瀬戸内系の中形甕、21は小形、22は中形の大和型甕である。23は大形の大和・瀬戸内折衷型甕である。20は口縁部が強く外反し、口縁端部が突出するものである。体部上半はハケ、下半はケズリをおこなう。口縁部には局部的に5つの刻目をもつ。21・22は同形態で、口縁部がゆるやかに外反するものである。口縁部には刻目をいれ、外面と口縁部内面には粗いハケを施す。23は口縁部がゆるやかに外反し、端部は面をもつ。口縁部にハケ原体による刻目、また、内面には横位の粗いハケを施す点は手法的に21・22に似る。体部外面は粗いハケ後ケズリをおこない、最終的にミガキ調整で仕上げる。内面は全面に粗いハケが残る。このような手法は20の甕と同じである。本土器の内面全体には赤色顔料の付着がみられる。

SK-120出土土器(第24~26図)

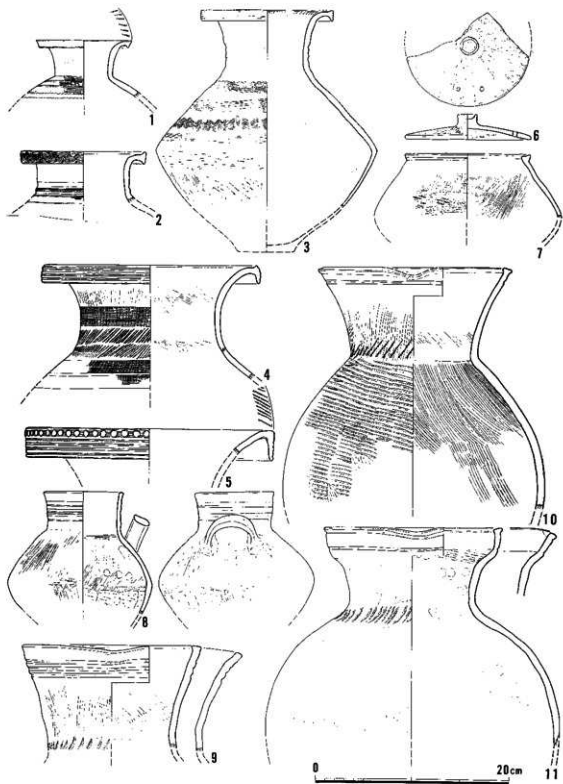
SK-120は大形の井戸であるが、この上層である炭灰層を中心に多くの土器が出土している。井戸の埋没過程で土器の廃棄穴となったと考えられ、大形破片が多い。完形品はないが、第25図-18に示す土器は井戸への供献土器である。第24~26図に示す土器は全て上層出土であるが、第24図-1、第25図-17、第26図-29は中層出土のものと同接する。

壺・甕蓋 第24図-1~5・7~11は壺である。1~5は広口壺で、1は小形、2・3は中形、4・5は大形品になる。1~4は口縁部が上方と下方に突出し、端部は広い面となる。1・3は口縁部内面に櫛插列点を施す。口縁端部には、2は櫛插波状文、3・4は4条の凹線文、5は6条の凹線文上に円形浮文を貼付する。1の壺は胴部上半に櫛插直線文・簾状文・直線文・波状文の順に施す。2は頸部下に幅広の2条の凹線文をいれ、胴部上端には櫛插直線文が施文される。3も2同様の凹線文が5条施されるが、最下段の凹線文は不明瞭となる。胴部上半は稚拙な櫛插波状文と直線文が交互に施文されている。胴部下半は鋭利なケズリのため、器壁が薄くなっている。ミガキは胴部中央部を横位方向におこない、最後に胴部下半をハケ調整で仕上げる。4は頸部から胴部にかけて櫛插簾状文と列点文を施文する。5は口縁部を下方へ大きく垂下させたものである。口縁部上面には櫛插列点を施す。

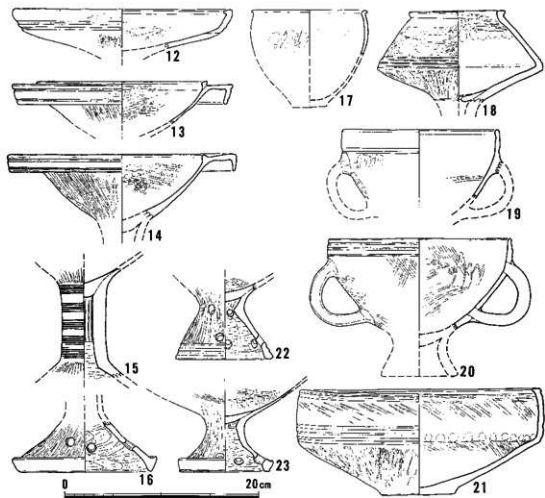
6は無頸壺の蓋である。扁平な体部と上部に突出したつまみ部がつく。外面にはミガキが施されている。内面はナデ調整である。

7は無頸壺である。口縁部が外方へ突出し、上面はやや凹む。外面はタタキ成形後、縦位のハケ、横位のミガキによって仕上げる。内面は丁寧なハケ調整をおこなう。

8は水差形土器である。やや小形品で、把手も貼り付けの小さいものである。口頸部には4条の浅い幅広の不明瞭な凹線文が施される。胴部上半はハケ後ナデ調整、下半はミガキ調整をおこなう。内面の体部下半は鋭い横位のケズリがみられ、器壁が薄くなっている。上半はハケとし



第24图 SK-120 出土土器 1 (S=1/4)

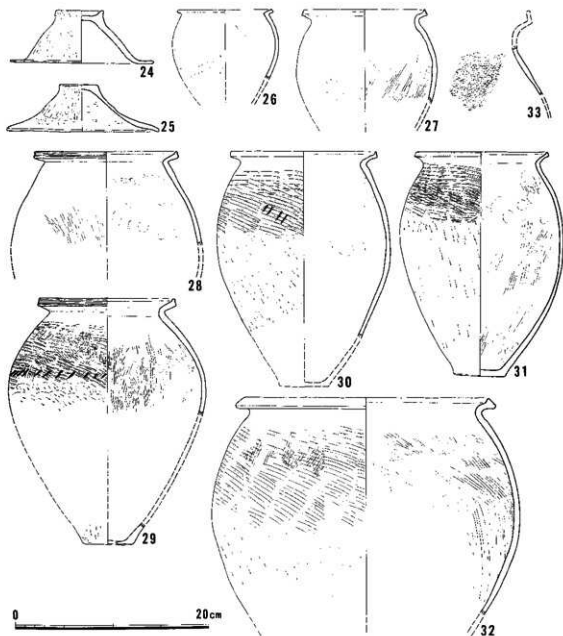


第25図 SK-120 出土土器2 (S=1/4)

はり痕がみられる。

9～11は短頸甕である。9・10は口頸部が直口するもの、11は受口状の口縁形態を呈すもので、いずれも片口としている。9は口頸部は3条の凹線文、10は1条の凹線文をめぐらす。また、頸胴部界にはヘラ・ハケ原体による列点を各々いれている。10は胴部上半に左下がりのタタキ、下半にはケズリがみられる。11は受口部に2条の凹線文が施され、頸胴部界にはハケによる列点をいれる。胴部上半はハケ、下半はケズリ調整をおこなう。内面はナデ調整を施す。土器は全体に赤褐色を呈し、二次焼成を受けている。

高杯・鉢 第25図-12～16は高杯である。12は浅い杯部で、口縁部が内側へ突出する形態である。杯部の屈曲部には2条の凹線文が施される。杯部下半はケズリの後、ミガキ調整をおこなう。内面は横位のミガキを施す。13・14は水平縁口縁の高杯である。口縁部は下方へ垂下し、2



第26図 SK-120 出土土器 3 (S=1/4)

糸の凹線文を施す。水平線部と杯部の界は内側へ突帯をつける。13は水平線上面に斜位のミガキ(暗文)、14は斜格子のミガキ(暗文)を施す。両者とも外面はケズリ後ミガキ、内面は横位のミガキをおこなう。15は水平線口縁の高杯脚部である。柱状の脚部に横直線文を5帯施文する。杯部と脚部にはミガキがみられる。内面はケズリを施す。杯部は凹板充墳をおこなう。16は脚部

部である。端部は上方へ突出する。口孔6つを透しとする。脚柱部との界には櫛描と思われる直線文がみられる。内面は鋭利なケズリ調整がおこなわれ、器壁が薄い。榊端部から内面にかけて煤が付着しており、甕の蓋として転用したものであろう。

第25図-17~23は鉢である。17は碗形の鉢で、口縁部は短く外反する。内外面はハケ調整をおこなう。外面の体部下半にはケズリがみられる。18は脚付鉢であるが、脚部は欠損している。体部下位で大きく屈曲し、4条の細い凹線文を施す。口縁部は外方へ突出し、上面は平らになる。体部上半は横位のミガキ、下半はケズリの後、縦位のミガキを施す。脚部との界にも1条以上の凹線文をめぐらす。体部は円盤充填をおこなうが、その中央部に径0.6cmの孔を穿つ。井戸への供献土器のためであろう。19・20は把手付の鉢である。碗形の鉢の両側に縦方向の把手をつける。19は1条の凹線文で貼り付けの把手、20は3条の凹線文で挿入式の把手である。いずれも体部下半にはケズリがみられる。21は体部がやや扁平な鉢である。口縁部は内側へ突出する。口縁部と体部の屈曲部には1条と3条の凹線文がめぐらされる。体部上半にはわずかにタタキの痕跡があるが、ヨコナデによって消される。体部下半はケズリ後ハケ調整をおこなう。内面は粗いハケをナデによって消す。外面の体部下半には煤の付着がみられる。22・23は鉢の脚台と思われる。22はやや内湾ぎみに立ち上がるのに対し、23は外反ぎみに立ち上がる脚部である。22は脚端部に2条の凹線文と上段に4孔・下段に6孔の透孔をもつ。外面はミガキ、脚部内面はケズリをおこなう。23は脚端部が上方へ突出する。脚部には5つの透孔をもつ。外面と鉢部内面はミガキ、脚部内面は鋭いケズリをおこなう。

甕蓋・甕 第26図-24・25は甕の蓋である。両者とも笠形を呈す。24のつまみ部は指頭によってつまみ出し、上方へ突出する。外面はケズリをおこなうが、ナデ調整によって消される。内面もナデをおこなう。煤は内外面とも付着している。25は外面にケズリ調整、内面にはハケ後ナデ調整がみられる。煤は内面の裾部に付着している。

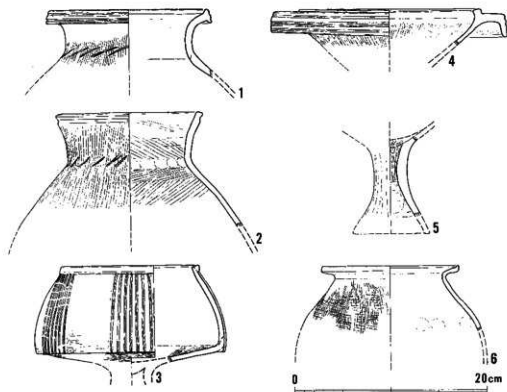
第26図-26~33は甕である。26は小形の甕である。口縁部は短く外反し、端部は面をもつ。体部上半は斜位のハケ後、ナデ調整をおこなう。下半はケズリ後にミガキによって器面を整える。内面は丁寧なナデ調整である。煤の付着はみられない。27~31は中形の甕である。口径14cm、器高25cm前後の大きさとなる。27は一回り小さい。27の口縁部は外上方へ屈曲し、端部は鋭く上方へ突出する。口縁部端部には2条の凹線文をめぐらす。外面は体部上半に粗い粗雑なハケ調整、下半にケズリがみられる。内面は粗いハケ調整をおこなう。28は内外面とも丁寧なナデ調整をおこない、口縁端部も2条の凹線文とともにヨコナデを強くおこなう精緻な土器である。29も口縁端部は上方へ突出し、端部には不明瞭ながら2条の凹線文を施す。体部上半は左上がりのタタキをわずかにハケで消す。下半はケズリをおこなう。ハケによる列点を体部の最大径や上位にめぐらす。30・31はほぼ同手法の甕で、30は29同様ハケ原体による列点を局部的に4つ施文する。31は体部下半をナデによってケズリを消す。32は大形の甕である。口縁部は短く厚い。内外面は中形甕と同じ手法である。33は近江産の甕で、櫛描直線文・列点とヘラ描斜格子文がみられる。

SD-109出土土器(第27~33図)

SD-109はムラ南端の環濠であり、この大溝の上層から最下層にわたって多量の土器を検出した。土器は特に中層と下層に多く、この土層内には多くの定形にちかい土器がある。上層から最下層に至る層序の差は土器型式に相応し、ほぼ4つの様相を現している。それは、第四様式から第五様式後葉までの4様相で、これらの土器は異層間で接合するものがあるが、ほぼ次のような状況を呈す。第四様式(第27図)は最下層を中心に出土した土器であるが、第27図-3は上・中・下層で接合し、この時期より新しくなるかも知れない。次に第五様式初頭としては、第28・29図の土器で下層・最下層を中心に出土したが、その一部は中層や上層と接合するものがある。三番目は第五様式中葉で、第30・31図の土器である。これらは下層と中層を中心に出土した土器である。四番目は第五様式後葉で、第32図の土器である。ここの土器は上層を中心に出土した土器であるが、その一部は中層上位の遺物も含まれる。この詳細は後日の報告とし、ここではほぼ4つの様相をもつことを明らかにしておく。以下、各様式ごとに土器の特徴を述べたい。

第四様式(第27図)

壺 第27図-1は広口壺、2は短頸壺、3は台付無頸壺である。1の口縁部は上下に肥厚し、



第27図 SD-109 出土土器1 (S=1/4)

2条の凹線文をめぐらす。頸部と胴部の界にはヘラによる列点が施される。2の短頸壺は口縁部が直口するタイプで、口縁部に1条の凹線文、頸部と胴部の界にはハケ原体による列点がめぐらされる。内外面とも粗いハケ調整で仕上げられている。外面には煤の付着がみられる。3は胴部下半が水平ちかくにひろがる台付無頸壺で、口縁部は外側に粘土帯を貼り付けている。胴部には縦方向に粘土帯を7条、5ヵ所に配置している。この貼り付け突帯間や内外面の胴部下半にはミガキが施される。

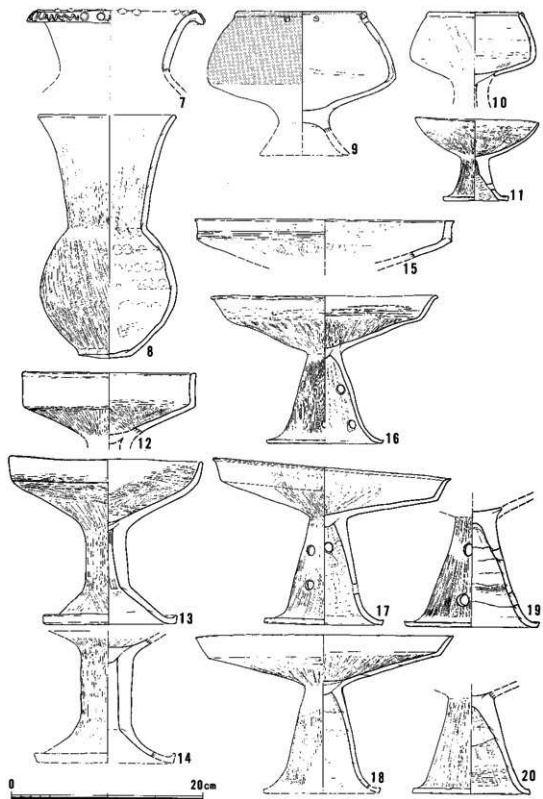
高杯 第27図-4は水平縁の高杯、5は椀状の高杯の脚部である。4は垂下する口縁部に4条の凹線文をめぐらす。杯部の外面はヘラケズリによって薄くなっている。内外面ともにヘラミガキによって仕上げられている。5の脚部は上下端ともに欠損しているが、上端には円盤状の痕が残る。外面はミガキ、内面にケズリ痕が残る。

甕 第27図-6は中形の甕である。口縁部はハネ上げ口縁で、強いヨコナデが施される。胴部は左下がりのタタキの後、ハケ調整でタタキを消す。外面には煤の付着がみられる。

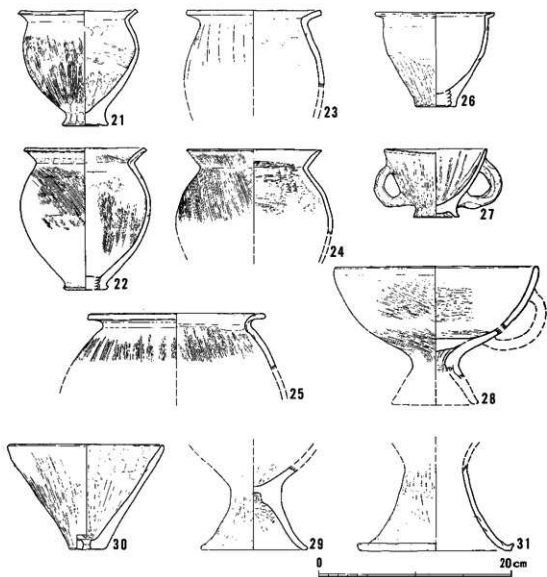
第五様式初頸(第28・29図)

壺 第28図-7は広口壺、8は長頸壺、9・10は台付無頸壺である。10は台付鉢とすべきかも知れない。7は口縁部を垂下させる。口縁部とその上端には2個一對の円形浮文を7ヵ所に貼付し、その間には楕円波状文を配置する。全体にナデ調整で仕上げる。8は口頸部が大きく、体部とのバランスがとれておらず、やや鈍重な感を与えるものである。胴部下半はケズリによって器壁が薄くなっている。外面及び口頸部内面はミガキが施される。胴部内面は一部にケズリがみられるが、全体に指頭尻痕を残している。9は第27図-3の無頸壺に比べ、シャープさに欠ける。口縁部は粘土帯の貼り付けで成形しているが、小さくなっている。内外面ともに器面は荒れているが、胴部には赤色塗彩が残る。10も9同様の形態をとっており、口縁部は小さな粘土帯の貼り付けによって成形している。外面には細い縦位のミガキが施される。本土器には紐通孔がなく、台付鉢の可能性が高い。

高杯 第28図-11~20は高杯である。高杯は3つのタイプがみい出される。11は椀形の杯部を有するもので小形品である。内外面とも細柔のハケ調整によって仕上げられている。脚部の裾部はあまりひらかず短く、また、透孔は一孔のみである。脚部内面にはケズリ調整がみられる。2番目は杯部の立ち上がり部がやや直立さみになり、脚部が柱状となるタイプで、12~14である。12の杯部は立ち上がり部が高く屈曲部は明瞭である。ミガキは杯部下半の内外面に施される。13は柱状の脚部にゆるやかに内湾する杯部がつく。杯部の屈曲部は不明瞭ながら1条の浅い凹線文がはいるが、ミガキ調整によって消される。全体に粗いミガキが施される。14は柱状の脚部で、棒状のものに巻きつけて柱状部を成形している。内外面に煤の付着がみられる。3番目は15~20の高杯である。これらの高杯は杯部の立ち上がり部が外反し、脚部はハの字状にひろがるタイプである。15は杯部の立ち上がり部の器壁が厚く、口縁端部は平坦になっている。屈曲部には2条の凹線文がめぐらされる。16~20の脚部はいずれも同様の形態を呈しており、脚部の裾はあまり



第28图 SD-109 出土土器2 (S=1/4)



第29図 S D-109 出土土器 3 (S=矸)

ひらかず、透孔をもつものもたないものがある。透孔はいずれも大きく、脚部の上下二段に穿つ。17の脚部内面にはケズリがみられる。杯部は浅くなり、立ち上がり部は短く外反している。18の口縁端部は鋭い。

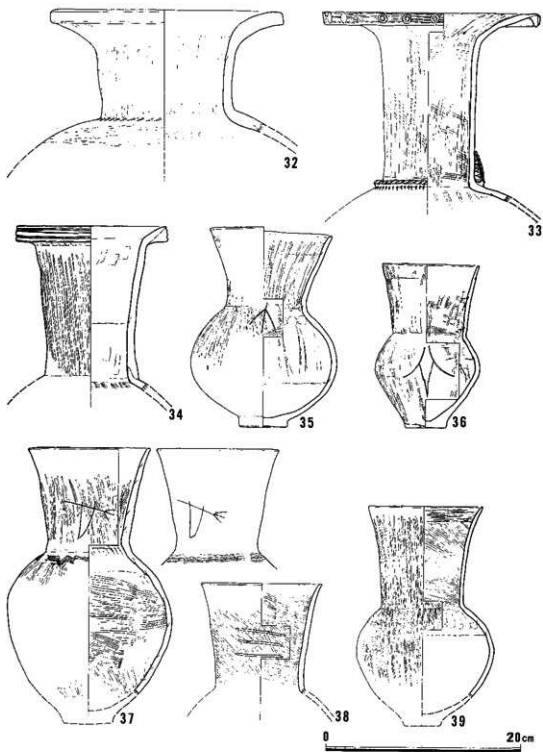
甕 第29図-21～25は甕である。21・22は小形、23・24は中形、25は大形の甕である。いずれの甕も口縁端部は面をもつ。外面はハケ調整をおこなう。25の甕では外面にミガキ調整をおこなう。21・22・24は口縁部の屈曲も明瞭でシャープなつくりであるのに対し、23・25は弱いヨコナデで口縁部は不揃いとなり、やや鈍重さを与える。

鉢・器台 第29図-26～30は鉢、31は器台である。26は堯にちかい形態である。口縁部はわずかに上方へ肥厚している。全体に器壁は薄い。胴部下半にはケズリがみられる。27～29は碗形の鉢で、27は両側に、28は一方に縦方向の把手がつく。27は内外面ともにミガキをおこなう。28は外面をケズリ、その後ミガキを施す。脚部には円盤充墳がみられる。29も28と同様のものであろう。30は漏斗状の形態をもつ有孔鉢である。器壁はやや厚い。内外面ともハケ調整後、ナデをおこなう。

31は器台の下半部で裾部は高杯の脚部に似る。外面はケズリ調整のまま粗雑である。器壁は薄い。

第五様式中葉(第30・31図)

壺 第30図-32～39、第31図-40～42は壺である。32は大形の広口壺である。厚手のつくりで口縁部は特に厚くなる。内外面は太いミガキが施される。頸部と胴部の界にはヘラによる列点めぐる。33～41は長頸壺である。33は口縁部が大きく外反し、端部は下方へ垂下する。口頸部の形態は器台に似る。口縁端部には4条単位の櫛原体による直線文をめぐらし、その上に3個一対の円形浮文を6ヵ所に貼付する。円形浮文には竹筴文を押捺する。頸部と胴部の界には1条の貼り付け突帯をめぐらし、突帯上にはヘラによる刻目をいれる。また、この突帯の上下両側には半截竹管状工具による押捺めぐるされる。口頸部はハケ後ミガキを施す。34は33同様の形態であるが、口縁部の外反は短く、器壁も厚い。口縁部は下方へ粘土帯を貼り付け、端部をつくっている。端部には3条のヘラ描直線文がめぐる。外面にミガキ、内面はハケ後ナデ調整である。35は口頸部が外反し、胴部がやや扁球形になるもので、頸部から胴部へはゆるやかに屈曲する。口縁部は不揃いでシャープさに欠ける土器である。胴部の上半には矢印形の記号文がヘラによってつけられている。頸部の内外面と胴部上半にはミガキが施される。胴部下半はナデ調整である。36はやや小形の長頸壺である。均整のとれた形態を呈している。胴部の中央には傘形に似た記号文がヘラによって刻まれている。内外面はミガキ調整で仕上げる。37は縦長の胴部にやや外反した口縁部がつく。口縁部はやや丸みがあるが面をもっている。胴部上端には粗雑な櫛波状文をめぐらす。頭部には針状工具による細線の記号文が両側一対描かれている。記号文は三日月の下半分状のものに矢印状の記号が貫いているという組み合わせである。頭部内外面と胴部にはミガキが施される。胴部内面はハケ調整が残る。本土器はその形態等から时期的に古く第五様式初頭の可能性がある。38は長頸壺の頸部である。内外面とも粗いハケ調整を施している。頸部の中央には、ヘラによる3条の横線の記号文が描かれている。39は器壁の薄い長頸壺で、均整のとれた形態である。ミガキは外面のみ施している。胴部の上端にはヘラによる4条の縦線の記号文が描かれている。第31図-40・41は縦長の胴部で、長頸壺にしてはやや短い頸部がつく。40は内外面とも丁寧なナデ調整によって仕上げられている。41は口縁部が外反する。外面はハケ後ミガキ調整をおこなう。底部の縁辺にはケズリがみられる。また、底部裏面に十字形のヘラによる記号文が描かれている。42は直立ぎみの短い口頸部がつく。内外面とも丁寧なナデ調整をおこなう。胴部下半



第30图 SD-109 出土土器4 (S=1/4)

には煤の付着がみられ、煮沸に使われていたのであろう。

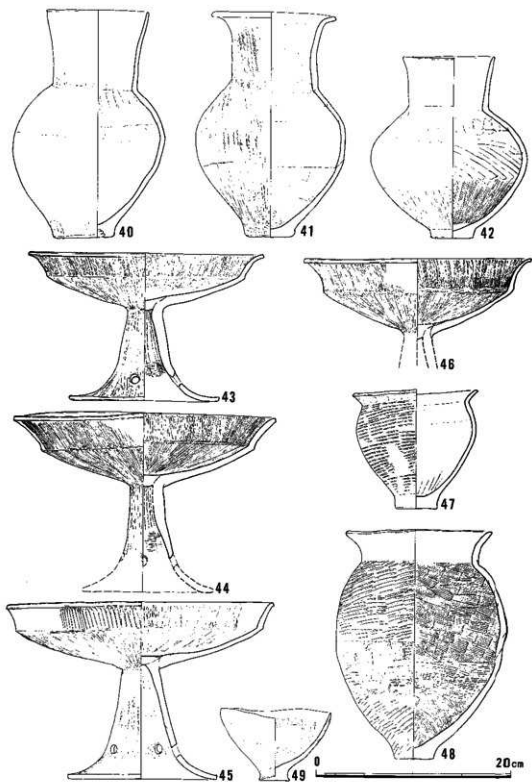
高杯 第31図-43～46は高杯である。いずれも浅い皿状の杯部に立ち上がり部が外反する口縁部がつく。脚部はハの字状にひろき、裾部も大きくひろがる。脚部の透孔は、43が3つ、44が4つ、45が5つでいずれも裾部ちかくに穿っている。口縁端部はいずれも面をもつが、46では端部が下方へ肥厚する。杯部の内外面は丁寧なミガキ調整をおこなうが、45では口縁部分のミガキが連続的に施され波状の暗文ふうになっている。46は器壁の薄い杯部である。脚部とは接合部で剥落している。

甕 第31図-47・48は甕である。47は小形、48は大形の甕となる。47は口縁端部に面をもつ。右上がりりのタタキが全面にみられる。胴部中央には成形時のヒビ割れをナデによって整えた跡がみられる。煤の付着はみられない。48は口縁部の外反が弱いもので、口縁端部が丸くなる。外面には右上がりりのタタキが、胴部下半・中央・上半の各成形に相応している。胴部中央はハケによってタタキが消されている。内面のハケ調整も外面のタタキに相応するように施されている。外面には煤の付着がみられる。

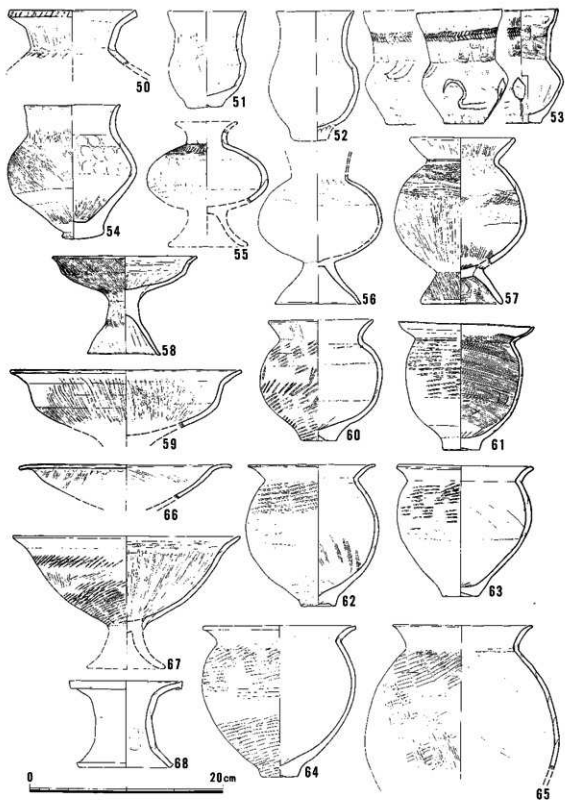
鉢 第31図-49は碗形の鉢である。粗雑なつくりで、外面はナデ調整をおこなうが接合痕が残っている。また、口縁部も不揃いになっている。底部は指頭によってつまみだしている。内面はハケ調整仕上げである。

第五様式後索(第32図)

壺 第32図-50～57は壺である。50は広口壺の口縁部である。口縁端部は上方へ突出する。口縁端部と胴部上端にはハケ状工具による列点がめぐる。51～53は小形の長頸壺である。51・52は頸部と胴部との界が不明瞭なもので、円筒状を早している。51は外面にハケ調整、52はミガキ調整を施す。53は頸胴部の界が明瞭で、胴部は張り出す。頸部の中央には、3条の直線文を引いた後上下に斜線を挿入し綾杉文状にめぐらしている。胴部には上端から下半にかけて3つの記号が描かれている。左端は三日月の下半分状のもの中央に一線を挿入したもの。中央は逆S字状のもの、右端は木ノ葉状のものである。外面はハケ調整で仕上げている。54は短頸壺である。全体に不整形な土器である。内外面ともハケ後、ナデ調整をおこなう。外面全体には煤の付着がみられる。55～57は台付壺である。55の口縁部・脚台は欠失している。胴部は楕球形を早し、胴部の上端にはハケ後柳播の直線文と列点文を施す。胴部中央と下半はミガキをおこなう。内面は丁寧なナデ調整である。本土器の色調は乳褐色を早し、搬入土器と思われる。56は口頸部を欠失する。この土器も胴部が楕球形を早す。脚台はやや内湾ぎみに立ち上がる。器面はやや磨滅しているが、ハケ後ナデをおこなっている。器壁は全体に薄いつくりである。57は台付の広口壺である。胴部下半がやや張り出す形態となる。脚台は低いが安定した形である。外面は全体にハケ調整をおこなった後、口縁部はヨコナデ、胴部上半は柳播文様、胴部下半から脚台部はミガキをそれぞれ施す。柳播文様は粗雑で、上から直線文と波状文を組み合わせて稚拙に描いている。脚台部の内面と底部の内面は簾状にハケを施している。口縁部の内面にはミガキがみられる。本土器の



第31圖 S D-109 出土七器 5 (S=3/4)



第32圖 S D-109 出土土器 6 (S=1/4)

色調も乳褐色を呈しており、55同様櫛描文様や脚台をもつその形態から搬入土器と考えられる。

高杯 第32図-58・59は高杯である。58は小形の高杯で、脚部はあまりひらかず内湾ぎみに立ち上がる。脚部は中実となる。杯部の内外面と脚部外面はミガキをおこなう。この土器も色調が乳褐色を呈し、搬入土器と思われる。59は口縁部が大きく二段に外反する杯部で、このような形態の杯部は少ない。内外面はミガキ調整をおこなう。

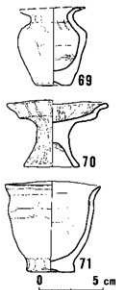
甕 第32図-60-65は甕である。60-63は小形の甕である。60は球形の胴部に小さく突出する底部がつく。口縁端部は丸い。外面には右上がりのタタキ成形がみられる。胴部中央の接合部はナデ調整とヘラによる押圧がみられる。内面は丁寧なナデ調整をおこなう。61は口縁部がわずかに受口状になるもので、全体に器壁が薄い。口縁端部は尖る。胴部上半から頸部にかけて右上がりのタタキがみられる。胴部下半はナデによって消されている。内面はハケ調整が残る。62は球形の胴部に小さく突出する底部がつく。口縁端部は外反し、端部は丸い。胴部上半には右上がりのタタキ成形がみられる。胴部下半はナデによってタタキが消される。63は胴部上半に張りがみられる甕で、口縁端部は面をもっている。胴部上半の外面の右上がりのタタキ、下半はナデ調整によってタタキが消されている。内面は丁寧なナデ調整をおこなう。外面には煤の付着がみられる。本上器は胎土から生駒西麓産と考えられる。64は中形の甕である。球形の胴部を呈し、口縁端部はやや丸いが面をもつ。外面は右上がりのタタキが全面にみられる。内面は丁寧なナデ調整をおこなう。65は人形の甕である。やや下胴部に張りを有するものである。口縁端部は丸い。外面には右上がりのタタキがみられるが、胴部下半はヘラ状工具によって消されている。

鉢・器台 第32図-66・67は中形の台付鉢である。66の口縁部はやや不整形で、鉢部は浅い。外面にはハケ、内面はナデ調整がみられる。67は口縁部がわずかに外反する。脚台部は接合部で欠失している。外面には右上がりのタタキが二回にわたって施されている。内面はハケ後、ミガキ調整をおこなう。

第32図-68は小形の器台である。円筒状の体部に外反する口縁部と裾部を付加する。口縁部は上・下方へ肥厚し、面をもつ。裾部も面をもつ。内面には、わずかにしぼり痕がみられるが、全体に丁寧なナデ調整で仕上げる。

ミニチュア土器(第33図)

ミニチュア土器は3点出土している。第33図-69は壺、70は高杯、71は甕である。いずれも粘土紐を用いている。指頭による成形でその圧痕が明瞭に残っている。70にはミガキがみられる。69はSD-109の下層、70・71は上層から出土している。

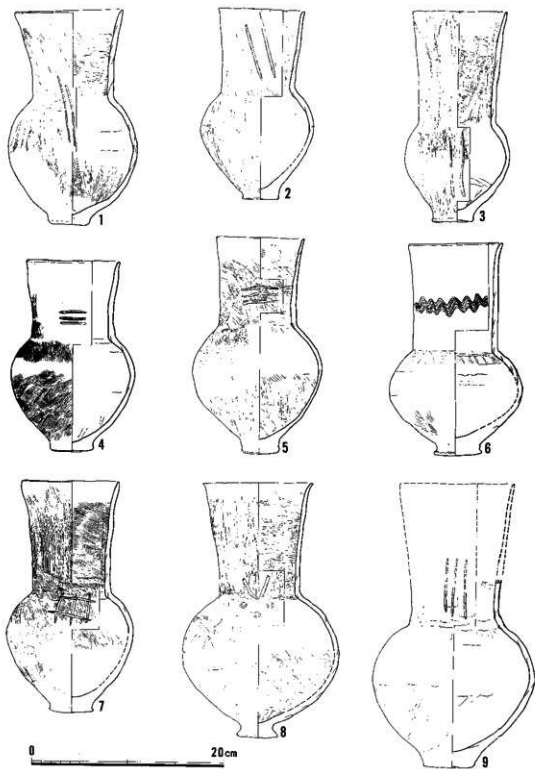


第33図 SD-109出土
土器7(S=1/2)

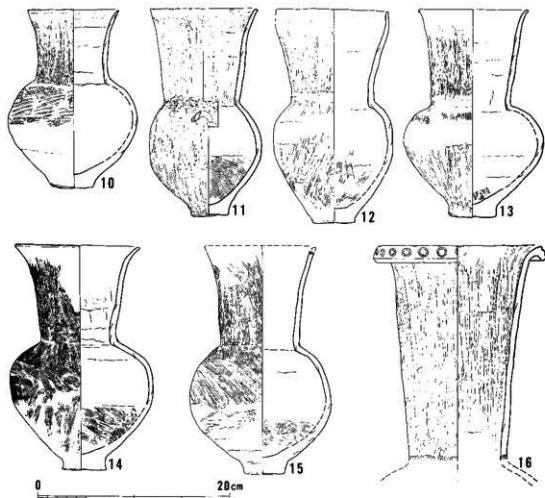
SK-125-出土土器 (第34~36図)

SK-125からは長頸壺を中心として多量の完形土器が出土している。特に第3層から出土したものが多く、あまり時間をおかず継続的に投棄されたものであろう。ただ、第7層から出土したものは、第3・4層のものとは層位的にも隔たりがありやや古い様相を示しているように思える。この第7層から出土した土器には、第34図-8、第35図-10・11、第36図-24があり、このうち、11は最下層から出土している。また、第4層出土土器としては、第34図-7・9、第35図-13がある。第2層出土土器は第36図-21で、この他はすべて第3層出土である。この第3層から出土した土器の中で、その上位より検出した第34図-4や第36図-18・22は第1・2層の土器と接合しており、短期間の投棄であることを物語っている。ここでは、記号文をもつ土器を中心に図示した。その全容については後に譲りたい。

壺 第34図-1~第35図-16は長頸壺である。いずれも球形の胴部に長い円筒状の頸部がつくが、同じ形態のものではなく個性に富んでいる。1は器面の剥落が激しい土器で、接合部に剥離している。外面はハケ調整後、ナデをおこなうが、頸部下半のハケはケズリにちかい。頸部下半から胴部上半にかけてヘラによる2条の縦線の記号が描かれている。2の長頸壺は均整のとれた形で、堅緻な焼成である。外面にはミガキ調整がみられる。頸部にはヘラによる2条の縦線の記号が描かれているが、この縦線は右手で描かれたためやや斜めになっている。3は口頸部が長く、頸部と胴部の界は不明瞭である。外面はハケ調整後ミガキをおこなう。胴部にはヘラによる2条の縦線の記号が描かれている。底部裏面にはケズリがみられる。1~3は同様のヘラ記号であるが、土器の形態や手法は各々異なる。4は外面にやや粗いハケ調整を残す。頸部にもハケが残るが、記号文部分はナデによって平滑にされている。記号文は頸部に3条の横線が描かれている。横線はその先端が細条に分かれているハケ状の原体によるものと思われる。外面には煤の付着がみられる。5は球形の胴部にやや細くなる頸部がつく。口頸部は粗いハケ、胴部は細いハケを施す。胴部上半にはわずかにタタキがみられる。胴部下半はナデによってハケが消される。頸部にはヘラによる3条の横線の記号が描かれる。6は堅緻な焼成の土器である。胴部上端は胴部のしぼりこみによって凹凸になっている。内外面は丁寧なナデ調整によって仕上げられている。頸部には、櫛描による波状の記号が右から左へと描かれている。7はやや頸部が長い。外面にはハケ調整がみられるが、頸部下端のハケは1の上層と類似している。胴部下半はナデによってハケが消される。胴部上半には、ヘラによる3条の縦線と2条の横線の組み合わせの記号が描かれる。8の長頸壺は均整のとれた形をしている。口縁部はやや外反し、端部はやや面をもつ。底部は小さいが、横へ突出し、指頭圧痕が残る。内外面にはハケ調整が残る。頸部下端にはヘラによる下向きの矢印状の記号、胴部上端には竹管文の記号が3つ押捺されている。9はやや大形の長頸壺である。口頸部は欠失している。外面は丁寧なナデ調整をおこなう。頸部にはヘラによる3条の縦線の記号が描かれている。第35図-10は胴部上半にタタキを残すが、ナデによってわずかに消える。頸部は外反し、口縁端部は鋭い。11は堅緻な焼成である。口縁端部は面をもつ。口縁部ちかくには



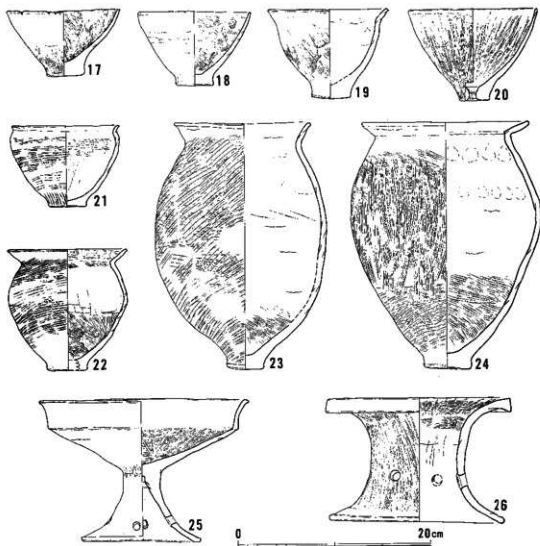
第34圖 SK-125 出土土器 1 (S = ¼)



第35図 SK-125 出土土器2 (S=3/4)

タタキが残るが、ハケ調整によって消される。外面は全体に丁寧なミガキをおこなう。胴部上端には逆U字形の浮文の記号が貼られていたが、剥落している。12は口縁部が内湾し、胴部上半で張りをもつ土器である。底部はあまり突出しない。13は堅緻な焼成の土器である。口縁端部はわずかに面をもつ。頸部・胴部上半は細かいハケ調整、胴部下半はミガキ調整を施す。14の長頸甕は口縁部が大きく外反する。14・15とも細かいハケ調整が外面に施される。16は大形の長頸甕で胴部は失う。口縁部は下方へ折れ、広い口縁端部を形成する。口縁端面には大きい竹管文がめぐる。内外面はミガキ調整を施す。

鉢 第36図-17-21は小形の鉢である。17・18は椀形の鉢で、外面はナダ、内面はハケ調整をおこなう。19は口縁部が外反するもので、外面には煤の付着、内面には炭化物の付着がみられる。



第36図 SK-125 出土土器 3 (S=1/4)

20は有孔鉢で、内外面はミガキ調整をおこなう。21は外面にタタキを残すもので、胴部上半はわずかに内湾してから小さく外反する口縁部がつく。

甕 第36図-22～24は甕である。22は小形品で、外面にはタタキが残るがこのタタキは21の鉢に類似する。23・24は大形の甕である。23は全面にタタキを残す。24は口縁部が強く外反し、端部はわずかに面をもつ。胴部上半はハケによってタタキが消される。

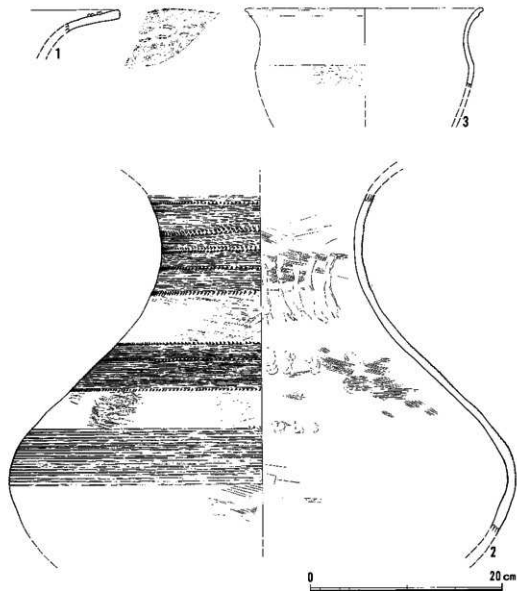
高杯・器台 第36図-25は高杯、26は器台である。25は口縁部が上方へ立ち上がり、面をもつ。杯部内底面のみミガキをおこなう。26は口縁部・裾部とも大きく外反し、内外面にミガキを施す。

搬入土器 (第37・38図)

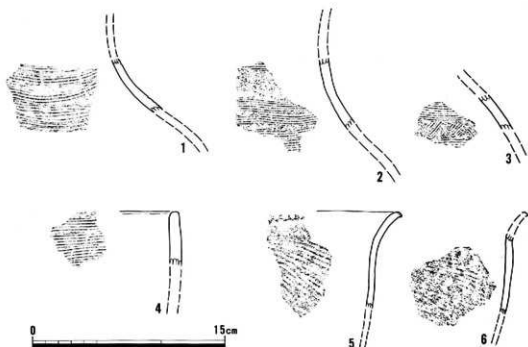
今回の調査においてもいままでの調査同様、多数の搬入土器を検出している。特に生駒西麓産や近江産、伊勢湾岸地方産などは広範囲にわたって出上している。

ここでは、本遺跡であまり出土例の知られないものを選んで報告する。

壺 第37図-1は広口長頸壺の口縁部である。口縁部は大きく外反し、端部は面をもつ。口縁部の内面は豆粒状の粘土を2列に貼り付け、豆粒の上をヘラで押捺する。貼り付けた粘土の下に



第37図 搬入土器実測図及び拓影 (S=1/4)

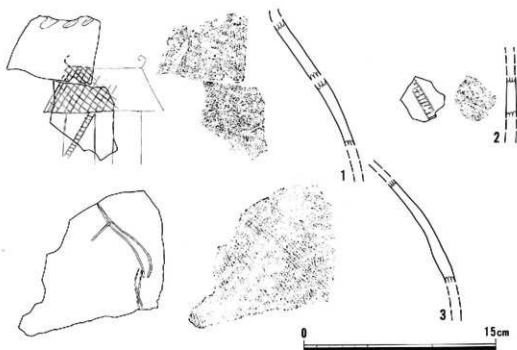


第38図 貝殻施文及び条痕文土器 (S=1/2)

は細くヘラ描沈線がめぐっており、粘土を貼り付けるための割付線と思われる。土器の色調は淡黒褐色を呈す。土器の形態から第一様式新段階と考えられる。口縁部内面にみられる2列の豆粒状の粘土帯の特徴から伊勢湾地方にみられる「亜流の遠賀川式土器」と判断される。S D-202・S D-205上面の黒褐色粘質土層から出土した。

第37図-2は大形の広口壺である。口縁部と底部は欠失している。扁球形の胴部に大きく外反する頸部がつく。外面は3帯の文様帯で構成されている。上段は頸部にあり、5~10条のヘラ描直線文5帯を描き、その間に三角列点文を充填する。中央部の三角列点文は二帯を重ねる。中段の文様帯は胴部上半にあり、9条・16条のヘラ描直線文を描き、その上・下端とその間に三角列点文を押捺する。下段の文様帯は胴部中央にあり、21条のヘラ描直線文をめぐらす。三角列点文はその上端に局部的に押捺する。文様帯間にはミガキを施す。内面はハケ後ナデ調整をおこなう。外面の色調は淡赤褐色を呈すが、内面は淡灰白色を呈す。この文様構成から播磨・摂津地方等の西方からの搬入土器であろう。S D-205から出土した。

壺 第37図-3は淡灰褐色を呈す壺である。胴部上半で口縁部は大きく湾曲する。口縁部はやや段状になっている。内外面ともナデ調整であるが、外面の胴部下半は粗いケズリをおこなう。土器の胎土には結晶片岩など多くの砂粒が混在している。壺の形態・胎土から紀伊地方のものと思われる。S D-205から出土した。



第39図 線刻画土器拓影 (S=1/5)

貝殻施文土器 第38図-1～4は貝殻による施文の土器である。1は広口壺の胴部上半の破片の上端と下端にはヘラ描直線文が描かれ、その間に3帯の貝殻描直線文がみられる。ヘラと貝殻の併用されたものである。S D-201より出土した。2は広口長頸壺の胴部上端の破片である。頸部下端に1帯、胴部上端に4帯の貝殻描直線文がみられる。S D-127から出土した。3は広口長頸壺の胴部片で、上下に貝殻による直線文とその間に波状文がめぐる。4は鉢の口縁部で、4帯以上の貝殻描直線文が描かれる。3・4ともにS D-202出土である。1～4の土器はいずれも貝殻施文の土器で、本来なら伊勢湾岸地方と考えられるが、胎土等からは明確にできず、検討を要する。

条痕文土器 第38図-5・6は甕である。あまり胴部の張らない甕で、口縁部は大きく外反する。いずれも外面には貝殻による調整がおこなわれている。5はS D-204、6はS D-205出土である。木土器も伊勢湾岸地方と関連づけられるが、今後の検討を要する。

線刻画土器 (第39図)

家 第39図-1は寄せ棟と思われる建物が短頸壺に線刻されている。短頸壺は頸胴部界にヘラ描列点をめぐらす。建物は左半分のみであるが、4本の柱(3間)が想定でき、右上がりの梯子がある。屋根には飾りがついている。S D-115上面出土。2は梯子で、包含層出土である。

水鳥 第39図-3はS K-120出土の短頸壺に描かれたもので、嘴と2本足から水鳥であろう。

(2) 木製品

木製品は弥生時代前期から後期にかけて多量に出土した。特に、弥生時代前期と中期の土坑から良好な状態で出土したものが注目される。これらは、木製品を貯木しておく土坑から出土したもので農具などの未成品が多い。弥生時代前期ではSK-208やSD-205、弥生時代中期ではSK-124、SK-134がある。その他、破損品には各種木製品が土坑や溝から廃棄された状態で出土している。

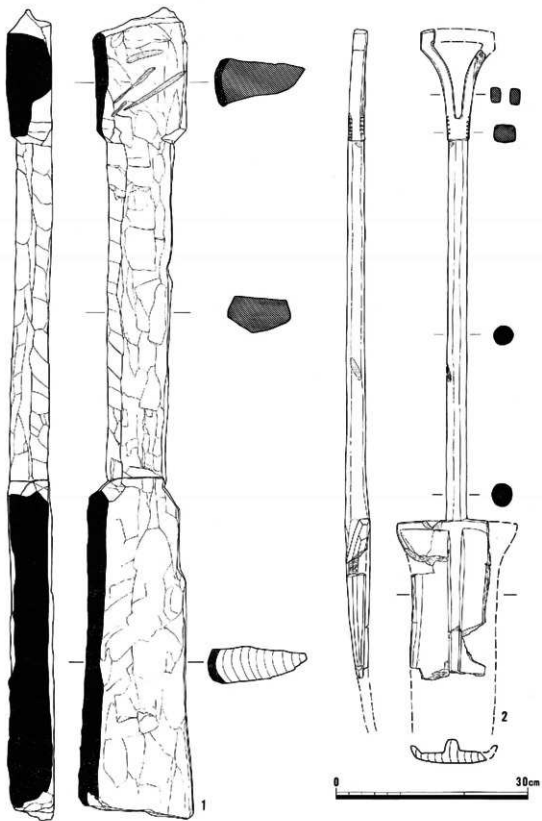
農具 (図版36-39、第40・41図)

鋨 鋨には広鋨、狭鋨、又鋨の三種があり、また、未成品も含まれている。図版36-5は2個体連結した広鋨の未成品である。両端に柄壺である舟形突起がつくり出されている。舟形突起は細長く先端がのびている。SD-205から出土した。この未成品といっしょに出土したものに、図版39-1の広鋨の未成品がある。ほぼ長方形を呈するもので、比較的丸い舟形突起がつくり出されているが、柄孔はまだ穿たれていない。また、刃部も未加工のままである。これに類似したものとして、図版39-2 (第41図・3) がある。ほぼ、同様の大きさ、形態を示すが、柄孔が穿たれている。刃部も加工するが、身部分が厚くさらに薄く仕上げられるものと考えられる。これはSK-208の下層上部から出土した。広鋨の製品としては、図版38-1・3、同39-4がある。いずれも破損品である。図版38-1の広鋨は舟形突起の両側に三角形の柄穴を穿つ。SD-202から出土した。図版38-2はSK-123から出土した広鋨で、舟形突起部分は焼失している。この広鋨は平面形が台形状を呈すが、刃部は外湾する。図版39-4はSD-127から出土した広鋨である。舟形突起は欠失している。身の両側に突出部をもつものである。

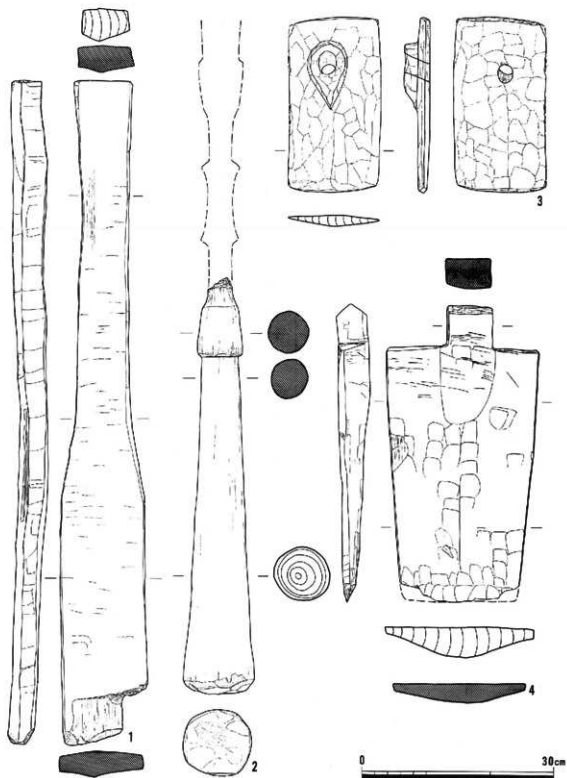
図版38-2はSK-208から出土した狭鋨である。刃部部分は欠失している。頭部から刃部にかけて身幅が狭くなっている。

図版39-5はSD-202から出土した又鋨である。頭部が幅広くなり、5-6本の刃先をもつと思われるが、両端は欠損している。刃先は丸い棒状で、先端は尖っている。残っている2本の刃先は長さが異っている。

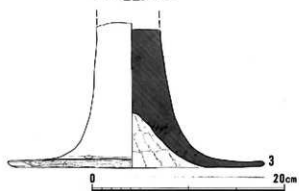
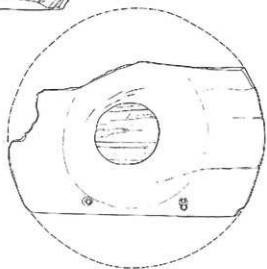
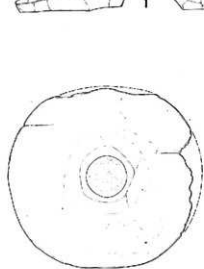
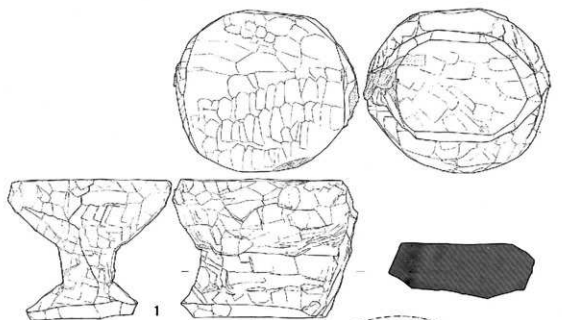
鋤 鋤には長柄鋤と着柄鋤の2種があり、また、未成品も含まれている。図版36-1・2 (第40図-1) は長柄鋤の未成品である。両者とも同じ形態で、把手・柄・身の三つの部分をつくり出している。これらの把手と身の側面には樹皮が残っており、みかん割りの板材に柄の部分の削り込んだ状態のものと推察される。これらはSK-208から広鋨とともに出土しており、製作途中の貯木品であろう。図版36-4 (第40図-2) はSD-110から出土した長柄鋤の製品である。把手と身部先端に欠損している。把手は柄より一段厚く断面方形となる。柄との境目ちかくには刻目を向面にいれる。身部は縦軸にそって中央に突帯を削りだす。また、両側縁も突出させ、身の周縁を縁どる。身部は細長くなる形態であろう。図版36-3 (第41図-1)・同37-2 (第41-4) はSK-124から出土した鋤の未成品である。図版36-3は長柄鋤、同37-2は着柄鋤の未成品である。3は身部先端に折れ面があるが、ほぼ完存している。一面はほぼ平滑に削るが、他面は中軸



第40图 木製品実測図1 (S=1/6)



第41图 木製品実測图2 (S=1/6)



第42図 木製品実測図3 (S=1/4)

形がおこなわれるが、加工痕は明瞭で荒削りの段階である。杯部や脚部の削り込みはまだみられない。SK-124の下層から出土した。図版43-2（第42図-2）・図版43-3（第42図-3）は高杯の脚部破片である。2は中形の高杯である。柱状の脚部に円形の裾部がつく。裾部はわずかに肥厚する。脚部の底面中央は小さく削り込む。SK-175から出土した。3は大形の高杯である。ゆるやかにひろく脚柱部をもつ。脚柱部の一辺は木目方向に沿って削れたと思われ、補修孔が3つみられるが一つは未貫通である。脚部底面の中央は大きく削り込んでいる。

図版44-1～3は匙である。図版44-1（第43図-1）は楕円形の身に斜めの柄がつく。身部は深く削り込んでつくられており、柄は身のやや下側につく。丁寧に仕上げている。SD-110から出土した。図版44-2（第43図-2）は身部が欠損しているが、浅い身部となる。柄は断面が扁平な板状となる。柄の先端と身部側の側面をやや突出させ刻目を入れる。SD-127から出土した。図版44-3はSK-124から出土したもので、全体に厚いつくりをしている。柄部は欠損している。

武器・祭祀具（図版45・第43図-5）

武器としては、木製の楯がある。図版45-3はSD-108、同45-4はSK-111から出土した楯の断片である。いずれも一面に赤色塗彩が施され、1mm前後の孔が横方向に並んでいる。他に漁猟具とすべきかも知れないが、SD-127から出土した刺突具（図版45-2）がある。

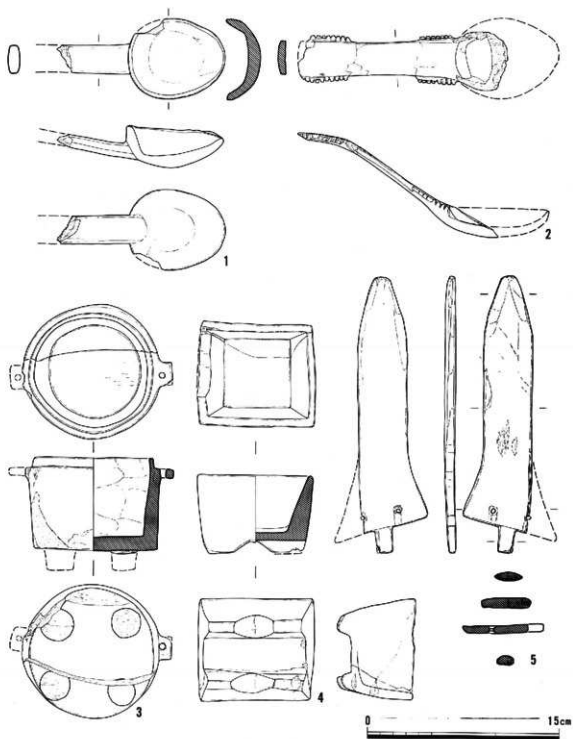
祭祀具としては、木製の戈がある。図版45-1（第43図-5）はSK-111の第4層上面から出土した戈である。薄い板を成形し、削戈を模したと考えられる。闕の一部は欠損しているが、ほぼ形のわかるものである。茎（内）は幅が狭いが長くつくられている。闕は一辺を失うが、発達しているようである。内ちかくに縦通し孔を2つ穿っている。身の部分は扁平で、穂等はみられない。切先は刃をつけていたが、丸みを呈し、磨耗していることから使用痕と判断されよう。また、闕の欠損も板目に沿っており、使用の際の圧力による欠損とも考えられよう。

用途不明品他（図版45～47）

図版46-2はSD-202から出土した建築材である。長方形の板の四隅と上辺中央に1cm前後の穴を穿つ。縦じるための穴であろう。

図版46-1はSK-123から出土したものである。本製品はわずかに湾曲をもつ蒲葺状の板で、規則性のある円孔が穿たれている。ふくらみのある面を表面とすると、上面左側と下辺は切り落とされたと考えられる。また、右側辺は少し削れているようで、何かに転用されたとみるべきであろう。裏面の下半分は浅く彫りくぼめているが、左右側辺は残している。ここに別のもののがはめこめられるのであろう。円孔は全て貫通しており、下二列は弓なりに穿たれている。本製品は転用されているため、判断できないが琴の可能性もあるように思われる。

図版45-5はつる状のものを巻いている断片である。図版45-6は何かの柄であろうか。図版47-1・2・4～6は棒状の端部に抉りを入れるもので何かの部分材のようである。



第43図 木製品実測図4 (S=1/5)

(3). 石器

石器は弥生時代を通じてみられるようである。特に、弥生時代前期から中期にかけての各遺構から数多く出土している。石器にはサヌカイト製の打製石器のほか、石庵丁や石斧などの磨製石器がみられる。遺構からみれば、量的に各種石器がまとまって出土しているものは少ない。比較的S D-109出土のものが多いほか、S D-108がそれに次ぐものである。いずれも溝資料で、土坑のものは少ない。他に、砥石・石錘・円球・流紋岩剥片などが出土しており、多種に及ぶ。

打製石器 (図版48～50)

石鏃 図版48-1～29は石鏃である。1～11はS D-109から出土している。2は最下層出土であるが、他は上層出土である。上層出土の石鏃は弥生時代後期後半のものであるから、混入の可能性もあるが、量的にまとまっている。1～6は有茎式、7～11は尖基式である。12～29は各種遺構から出土している。時期判別できるものとしては、弥生時代前期(14・17)、中期初頭から前半(13・16・18・27)、中期後半(12・15・19・21・22)、後期初頭(23・24・28)がある。前期から中期にかけてのものは石鏃の大きさが小さい。12～15は凹基式、16・17は円基式、18・23～26は有茎式、19～22・27～29は尖基式の石鏃である。

石剣・石槍 図版49-1～17は石剣・石槍である。いずれも完存品はなく、5はわずかに先端が欠けている。出土遺構はさまざまである。弥生時代前期末としては、6のS D-201出土のものがある。中期前半には2・5・7・10・12・16・17が、中期後半には1・9・14・15がある。5・6を除き、形態のわかるものは長身となり断面形態も菱形を呈するものが多い。17は先端を欠くが、現長16.6cmを計る長身のものである。丁寧な刃部調整がおこなわれるが、基部端面は自然面を残す。

石錐 図版50-1～11は石錐である。先端が欠損しているものが多く、また、錐部のものものもみられる。形態のわかるものはすべて、頭部と錐部から成り界が明瞭である。錐部は回転による磨耗がみられる。8は頭部端にもかなりの磨耗がみられ、丸くなっている。弥生時代前期のものは6、中期は1・2・4・7・9、後期は5・8・10である。

石小刀 図版50-12～17は石小刀である。12を除き、いずれも刃部先端を鉤状に湾曲する形態である。14・15は先端の一部を欠失、16は完存品で形態のよくわかるものである。13と15はほぼ同形のものであろう。14は基部に自然面を残し、刃部の下辺は磨減痕が認められる。15は刃部の内側に一つの突起をもつが小さい。基部は刃部から細く作られている。16はあまり湾曲しない刃部をもち、基部は細く作られている。基部端には自然面を残している。刃部は、両側辺とも細かい剝離調整をおこない、鋸歯状を呈している。17は基部が折れている。刃部には細かい剝離調整がみられる。12(写真2)は着柄の石小刀と思われるものである。着柄部分で折損しているため、形態の判定は困難であるが、石器の大きさや剣状にのびる形態、桜の皮の切れ方から縦方向の力の加わり方などを考慮すると、石小刀の可能性が高い。柄の部分は木製で、先端方向はやや細くなるが丸い棒状の形態である。細い方から三分の二まで二つに割り、石器を挿入できるようにし

ている。石器を挿入し、桜の皮で先端から基部方向に丁寧に巻いている。石器は柄に堅く固定され、動かない。これはSK-123の第2層から出土した。14はSD-109出土で弥生代後期、16はSK-134出土で弥生時代中期前半である。

磨製石器 (図版51~53)

石庖丁 図版51-1~4・8は石庖丁未成品、図版51-5~7・図版52-1~16は石庖丁の製品である。

図版51-1~4はすべて結晶片岩製の未成品である。いずれも製品にちかい半月形の形態に加工している。1と3はまだ厚みがあり、研磨はみられない。2・4は研磨がみられるが、まだ厚く、刃部調整や穿孔はみられない。

図版51-8は流紋岩製石庖丁の未成品

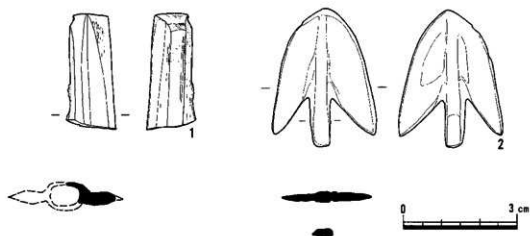
である。半月形の形態で直刃であろう。本製品は最終研磨をおこない、刃もつけているが、孔は未貫通である。孔は最初に敲打による凹みをつくり、後に錐による穿孔をおこなっている。これは両面からおこなっている。未成品はいずれも弥生時代中期の所産であるが、8はSD-108出土で弥生時代前期の遺構を切っていることから、混入品の可能性もある。

図版51-5・6は粘板岩製の石庖丁である。5は欠損しているが6と同様の長い長方形を呈するものと思われる。いずれも片刃で、直刃である。6は刃部中央に刃こぼれがみられ、刃はなくなっている。6はSD-110出土で弥生時代前期のものである。図版51-7は流紋岩製石庖丁である。直刃で6と同じ形態である。刃部は刃こぼれが激しく刃はなくなっている。SD-127から出土し、弥生時代中期初頭である。

図版52-1~16はすべて結晶片岩製石庖丁である。完形品は7のみで、他はすべて破片であるが、形態的には半月形直刃のものが多い。7は刃部が鋭くそれほど使用された形跡はない。これと同様に使用痕の少ないものに、3・12・14がある。これとは反対に刃部がなくなるほど刃こぼれしているものに1・2がある。また、刃部の使用痕にかたよりのあるものとしては1・6・13がある。紐孔の位置としてはかなり背部にちかいところにあけているもの(1・2・6・10・14・16)がある。1~3・12・16は弥生時代中期前半、4~11・13~15は弥生時代中期後半の所産である。



写真2 着柄の石小刀 (SK-123出土)



第44図 金属器実測図 (実大)

石斧 図版53-1-4は柱状片刃石斧である。1・4は抉入りである。1・2・4は刃部を欠損する。2は敲打痕が多く、敲石に転用されているようである。3は後端部欠損後、研ぎなおしをおこない使用している。2次的な焼成を受けているようである。

図版53-6・7・9は扁平片刃石斧である。6・7はサヌカイト製である。剥片を研磨し、石斧としている。7は刃部を欠く。9は刃部の一部を欠くが形態のわかる一例である。

図版53-8は小型方柱状片刃石斧であるが、後部のみで全体は不明である。

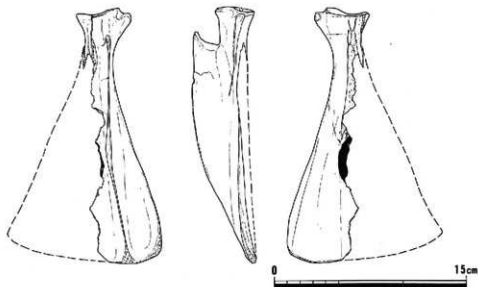
図版53-10~15は太型蛤刃石斧である。すべて断片である。10~12・14は刃部の破片である。10は刃部に刃こぼれがみられ鈍いが、11・12は刃部の一部を欠損するが鋭い。石斧の幅をみると10~12の幅広と13~15のやや細いもの2種がある。太型蛤刃石斧の小形品として図版53-5がある。両刃で鋭い。时期的には、弥生時代前期のものとして12、中期のものとして3・5・8・9・11、後期のものとして7・10・13がある。

(4) 金属器・骨角製品・玉類

金属器としては銅矛1点と銅鐵3点、骨角製品としては数点あるのみで加工を加えるものを含めると若干増える。玉類は管玉・勾玉など6点出土している。

金属器 (図版54・第44図)

銅矛 図版54-1 (第44図-1) はS D-120から出土した細形銅矛の断片である。穂の先端部分が残っていることや脊が中空になっていることから銅矛と考えられる。一面では脊から穂、翼の部分が残っているが、反対面(裏側)では脊や穂は研ぎ落されている。また、先端部分には片刃がつけられ、鑿として転用されている。銅質は良く、黒緑色・暗黄緑色を呈している。細片で全面研磨していることから型式断定は困難であるが、細形銅矛と考えられる。



第45図 ト骨実測図 (S = 1/5)

銅鏃 図版54-2 (第41図-2)・3・4は銅鏃である。いずれも有茎銅鏃で、逆刺をもつものである。2は逆刺が発達し、三角形にちかい形態を有する。断面は扁平で薄く、鋳上りは良い。錆化は進んでおらず、暗緑褐色を呈す。S D-109から出土した。3・4は柳葉形にちかいもので、断面は菱形を呈し厚い。錆化が進み、淡緑青色となっている。包含層から出土した。

骨角製品 (図版54)

用途不明品 図版54-5～7は用途不明の骨角製品である。5は鹿角の先端ちかくを加工し、円錐状の鋭利なものにしている。後部面にも丁寧な研磨がみられる。S K-111第3層から出土した。6は扁平な骨に擦り切り痕がみられる。S K-135から出土している。7はイノシシの牙の加工品で、ヘラ状工具になるかも知れない。S K-134の崩壊土から出土している。

針状骨製品 図版54-8～10は針状骨製品の断片である。8は後部端の部分で穴はなく丸い。太さは2mm前後である。8はS D-127、9はS K-134、10はS K-114から出土している。

玉類 (図版54)

ガラス小玉・勾玉・管玉 図版54-11・12はガラス製の小玉である。11はライトブルー、12はダークブルーを呈す。12は小玉を三分割した1片で側面を穿孔している。14は頭部を扁平に研磨した勾玉である。13・15・16は管玉で、13・16は碧玉製。16は長さ4.5cmを計る大形品である。

(5) 祭祀遺物

ト骨 (図版57-2、第45図)

ト骨は1点のみ出土した。図版57-2はS D-202から出土したものである。シカの左肩甲骨を

使用した卜骨で大形である。後縁から背縁にかけて大きく欠失している。また、乾燥等によるひび割れもみられる。整地はない。焼灼は肋骨面と外側面にみえるが、肋骨面の方が熱による変化が大きく、こちらから焼灼をおこなったと思われる。焼灼は棘下窩に1ヵ所あり、4.5cmほどの大きなもので、中心部は黒色で周辺は淡褐色を呈している。この部分は骨の最も薄い部分である。

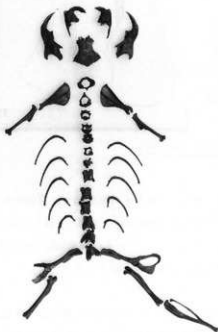


写真3 SK-114出土ネズミ (S=%)

3は下顎骨で若獣である。図版57-1-5はニホンジカである。1・4は鹿角で、切断痕がみられる。4は落角である。2は卜骨に使用された肩甲骨である。3・5は下顎骨であるが、3では先端ちかくを切り落しており刀子痕がみられる。小動物骨は粘土サンプルの水洗によって微細なものまで採集している。図版58-1はSK-114から出土したモグラ、写真3はネズミであるがSK-114最下層出土の広口壺内から出土している。同じようにSK-125出土壺からはカエル(図版58-2)が出土している。図版58-3はSK-133から出土した魚骨である。

穂束・種子類(図版59・60)

図版59-1-5は穂束である。穂の部分は欠失しているが、2-5では結束部分が残っている。同59-6-8は燃りのある縄状のものである。図版60-1はSK-134から出土したヒョウタンやモモなど、同60-2はSK-125出土のヒョウタンや炭化米でいずれも未鑑定である。

(6) 自然遺物

自然遺物としては、各種動物骨・炭化米・種子類、自然木等がある。これらは各時期の遺構から出土している。

動物骨(図版55-58・写真3)

動物の骨は弥生時代前期から後期の大溝や井戸から多く出土している。とりわけ、前期や中期ではイノシシなどの大形動物が目につく。多量に一括投棄されたものは少ないが、図版55-1・2に示すようにSK-123からは比較的まとまった状態で出土したものがあつた。これらはイノシシの骨で、各部位から数体分のもが含まれていることがわかる。頭骨から若獣と思われる。図版56-1-5もイノシシである。1・3・5はSD-202から出土したものである。1は頭骨で、後頭部は割られている。2はSK-111から出土したものであるが、これは頭部頂上が割られている。

4. まとめ

唐古・鍵遺跡の第33次調査は、遺跡地の南限を確認するという目的のためにおこなったが、予想以上の遺構の密集と多量の出土遺物のため、二年次にまたがる調査となった。今回の調査の成果から判断すると、唐古・鍵ムラの「居住区」の南端をほぼおさえることができたといえよう。今後、遺物整理の進行につれ、その実態が明らかにされようが、現時点での判明した点を簡単にまとめておきたい。

(1) 遺構

今回、検出した遺構は弥生時代前期から古墳時代前期までにおよび、土坑・大溝・小溝・柱穴などがある。特に弥生時代前期から後期までが多く、密集している。これは調査地がムラ南端にありながらも、一つの微高地にあっていたためである。特に、弥生時代前期はこの微高地が顕著にあらわれていたと思われ、調査地の北端と南端では大溝（S D-201・S D-202・S D-110）や落ち込み状遺構（S D-205）が検出され、微高地を囲んでいたようである。それはこれらの遺構の間で、木器貯蔵穴や土坑、柱穴などがみつまっていることから推察される。したがって、本調査地の地区（長軸200m、短軸100m程の規模）が一つの単位集団である可能性が高い。しかし、今回の調査では弥生時代前期でも古い段階はなく、新しい段階から生成されたもので、今までに想定されている北地区や西地区よりも新しく生まれたものである。

弥生時代中期以降はトレンチ北端の落ち込みはなくなり、北側には居住区が広がるようになる。現段階では、中期前半におけるムラを囲む南側の大溝がどれか判断できない。S D-110かさらに南側に存在する可能性も残している。環濠として顕在化してくるのは、第Ⅲ様式後半以降で、S D-108からS D-109と続いて掘削される。S D-109は後期終末まで再掘削をくり返し、維持されることになる。環濠については、第3次調査との関係を明らかにしておく必要がある。第3次調査のS D-06は第33次調査のS D-108、同様にS D-02はS D-109、S D-01はS D-110の対応関係が想定されるが、現時点では位相的な関係を中心にみているから時間的に若干の齟齬をきたすもの（S D-01 ↔ S D-110）もあり、今後の調査・遺物整理の進展に期待したい。

弥生時代中期における土坑群も注目される。今回の調査では、S K-124やS K-134などの中期の木器貯蔵穴群が検出された。従来、本遺跡での中期における木器貯蔵穴群は稀で、井戸などを転用している例が多く、本地区が前期末以降木器生産に深くかかわっていたことが推察される。

もう一点重要な遺構として、土墳墓（S K-130）がある。これはトレンチ南端で検出したもので高杯が供献されていた。本遺跡においては、前期末の木棺墓を除き、中期以降は土器棺の検出のみであった。したがって、初めての検出であり本遺跡における葬制の一端を明らかにした点は大きい。しかし、今回検出した土墳墓は群を成すものではなさそうで、今後、本遺跡における方形周溝墓群などの墓域を明らかにしていく必要がある。

弥生時代後期も中期以降、継続的に居住区となっている。居住区の中でも注目されるのが大形

井戸である。井戸は今回の調査でも11基検出しているが、そのうち5基が弥生時代後期のものである。SK-114・SK-125・SK-133は井戸内に多くの完形土器を供献していたもので、後期における井戸祭祀の一端が明らかにされた。特にSK-125は多量の長頸壺が供献され、第3次調査におけるPit-5と類似するものであった。両遺構出土の長頸壺には同じハケ手法のものがみられることから、両調査地が同じ生活領域であることを物語っている。

(2) 遺物

土器編年 今回の調査においてもいくつかの良好な一括資料を得ている。そのいくつかは図示することができた。SK-208は私案による大和第Ⅱ-1様式の新しい段階（従来の第一様式新段階）の資料である。広口壺の長頸化傾向が進み、口縁部端面は文様で飾られるようになる。文様的には、多条のヘラ描沈線が施されるがまだ備描文はないようである。甕においては黒文様のものがほとんどで初期大和型甕にちかひものが出現していることが注目される。同様に私案の大和第Ⅲ-3様式としてSK-124、大和第Ⅳ-1様式としてSK-120がある。SD-109は大和第Ⅳ-2様式、第Ⅴ-1～2様式、第Ⅵ-2・3様式とはほぼ層位的に出土している。これらは大和における従来の空白を埋めたり、補強できる重要な資料となろう。

また、貝殻描文様や条痕文土器が今回の調査でも出土し、大和第Ⅰ～Ⅱ様式における伊勢湾岸地域との結びつきの強さを示している。

木製品の製作 多数の木器貯蔵穴に検出され、それに伴う製作途中の木製品も多く見つかった。長柄鋤・着柄鋤・広鍬など農具類が多く、製作工程をおさえる重要な資料になった。なかでも、容器である高杯の未成品は注目された。小形の高杯は連続した数個体分を一原材から作っていることが判明した。断面が台形あるいは方形の割材を一個体分の高杯分の大きさに分割し、加工していくもので、SK-124出土の高杯は良好な工程を示しているものといえよう。

木製戈の出土 本遺跡から木製戈が出土したのは初見である。時期は大和第Ⅲ-4様式であり、近畿における比較的早い時期の割戈の模倣といえよう。武器形祭器としては、第13次調査の石製矛、第23次調査の木製矛があるが、今回の木製戈はSK-111の厚い覆層上面で出土しており、祭祀儀礼に使われていた可能性が高いものである。使用痕のあることから模擬戦のようなものを想定できるのではなからうか。

銅矛の出土 細形銅矛は輸入品の可能性のあるものである。时期的に大和第Ⅱ-2様式と限定できる良好なものである。これは大和及び近畿地方に早い時期から輸入品が流入していることを示しており、多鈕細文鏡等東方地域出土の輸入品流入時期も再考が必要となろう。

以上、簡単であるが第33次調査における検出遺構と出土遺物についてまとめてみたが、ここに示したように、本地域は遺跡内にとって重要な一地区であることが判明した。

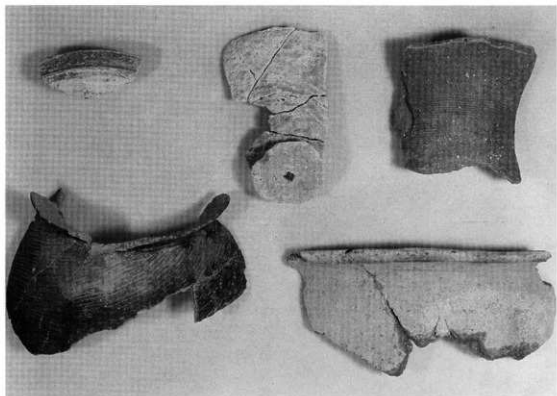
図 版

第32次調査…図版 1

第33次調査…図版2～60



a. SD-103 完掘状況



b. SD-103・包含層出土土器



a. 遺跡空中写真 (南から)



b. 発掘状況 (南から)



a. SD-110 完掘狀況



b. SD-202 完掘狀況



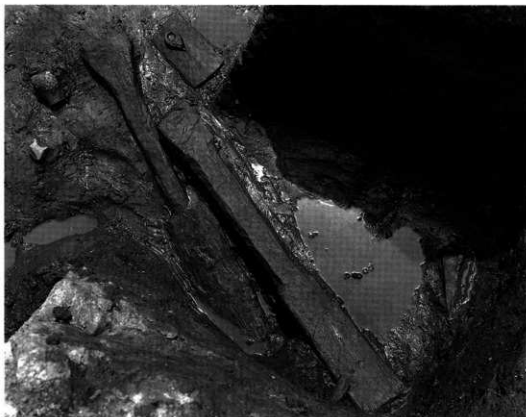
a. SD-127 完掘状況



b. SD-120 完掘状況



a. SD-205 遺物出土状況



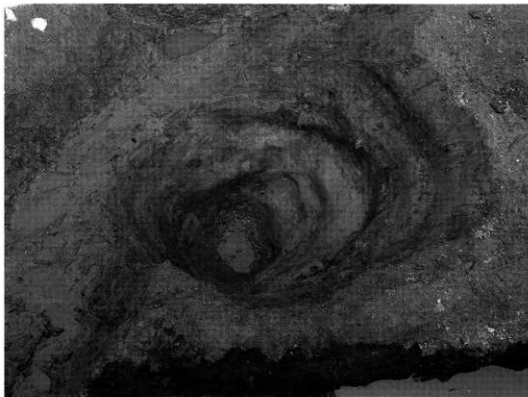
b. SK-208 遺物出土状況



a. SK-123 完掘狀況



b. SK-123 第 4 層遺物出土狀況



a. SK-175 完掘状況



b. SK-175 遺物出土状況



a. SK-124 完掘狀況



b. SK-124 下層遺物出土狀況



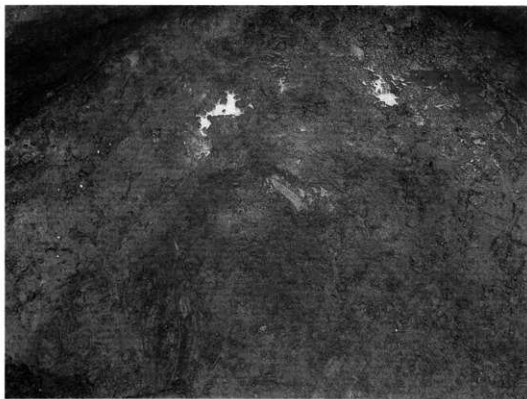
a. SK-124 中層遺物出土狀況



b. SK-124 中層遺物出土狀況



a. SK-111 完掘状況



b. SK-111 木製戈出土状況



a. SK-120 完掘状況



b. SK-120 中層遺物出土状況



a. SK-159 完掘状況



b. SK-130・柱穴完掘状況



a. SD-114 完掘状況



b. SD-108 完掘状況



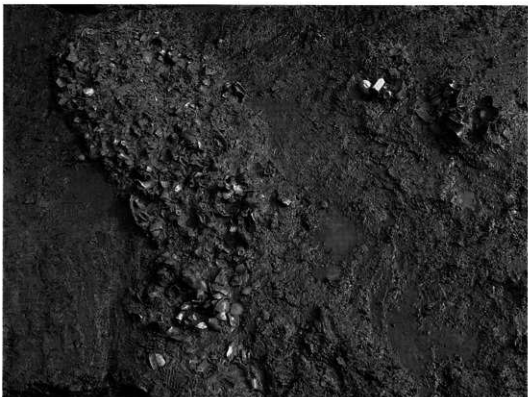
a. SD-109 完掘状況



b. SD-109 下層遺物出土状況



a. SD-109 中層遺物出土状況



b. SD-109 上層遺物出土状況



a. SK-125 完掘状況



b. SK-125 第3～4層遺物出土状況



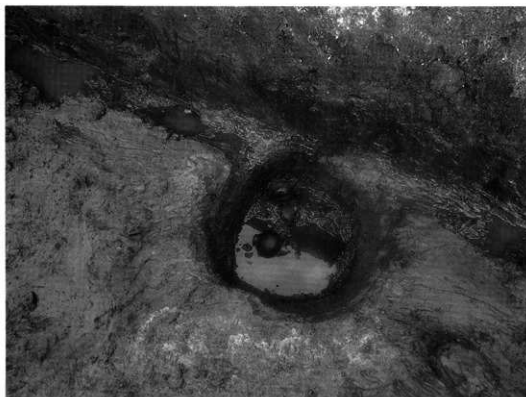
a. SK-125 第 3 層遺物出土狀況



b. SK-125 第 3 層遺物出土狀況



a. SK-133 完掘状況



b. SK-133 上層遺物出土状況



a. SK-114 完掘状況



b. SK-114 最下層遺物出土状況



a. SD-103 完掘状況



b. SD-103 遺物出土状況



a. トレンチ北端柱穴群



b. トレンチ北端柱穴群



1



2



1



2

1-S K-208出土土器、2-S K-130出土土器



1・4-S K-124出土土器、2・3-S K-120出土土器



1



2

1-S K-124出土土器、2-S K-168出土土器

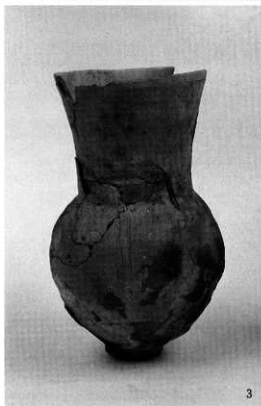
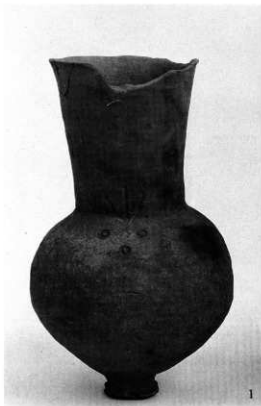


1



2

1 - S D - 123 出 土 土 器、 2 - S D - 202 A 出 土 土 器



1~4-S K-125出土土器



1



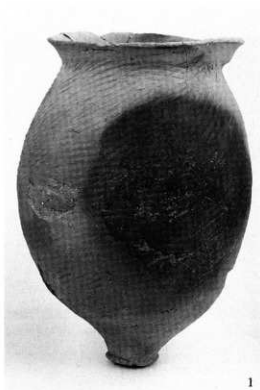
2



3



4





1



2



1



2



1



2



3

1-S K-114出土土器、2・3-S K133出土土器



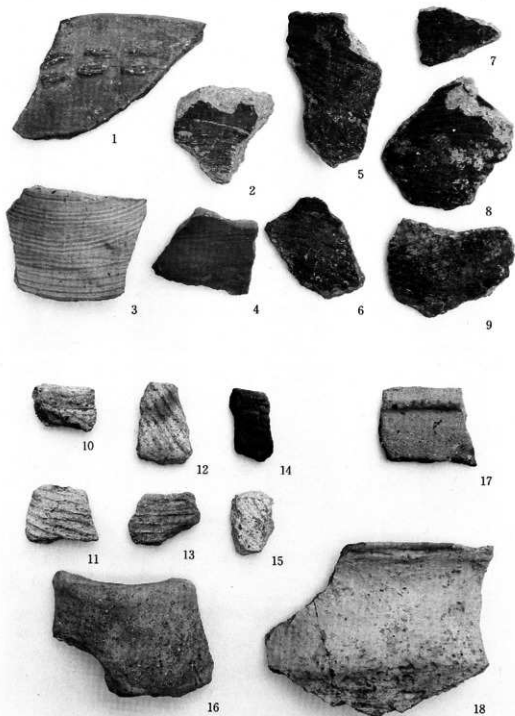
1~4-S D-109出土土器



1



2



1-S D-202・S D-205上面出土、2・4・7-S D-202出土、3-S D-201出土、
5-S D-204出土、6・8・9・18-S D-205出土、10-S K-161出土、
11-S K-123出土、12-S K-202出土、13・16-S D-114出土、
14・15-S K-171出土、17-前期河道出土、